

2018 年度 教育課程改善レポート

～「(2015～2017 年度) (期末) 授業アンケート」に見る教育成果と課題～

2018 年 9 月



学校法人 富山国際学園
富山短期大学

〔 目 次 〕

はじめに	1
【参考1】「中教審大学分科会将来構想部会「中間まとめ」(平成30年6月28日)」	
【参考2】「短期大学基準協会：(第3期) 認証評価の方針」	
【参考3】「教育改善のためのPDCAサイクルのルーティン化」	
【参考4】「「学修成果の可視化」及びDP・CPの検証手段としての「(期末) 授業アンケート」」	
I. 「(2015～2017年度) (期末) 授業アンケート」に見る教育成果と課題 (全体概要)	3
1. 教育成果と課題	
2. インプリケーションと課題	
3. その他の検討課題	
(資料1) 「「(期末) 授業アンケート」の質問項目」	
(資料2) 「「(2015～2017年度) (期末) 授業アンケート」集計結果(4学科合計(除く専攻科))」	
(資料3) 「「(2015～2017年度) (期末) 授業アンケート」結果の相関マトリックス	
(資料4) 「(2018年度入学生履修科目) カリキュラム・マップ」	
II. 学科・専攻科の「教育課程改善レポート」(骨子)	9
1. 食物栄養学科	
2. 幼児教育学科	
3. 経営情報学科	
4. 福祉学科	
5. 専攻科食物栄養専攻	
III. 学科・専攻科の教育理念・目標・「三つの方針」と教育成果・課題	13
【1】食物栄養学科	13
1. 学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー	
2. 「(期末) 授業アンケート」結果の概要・分析と学科の課題・改善方策	
【2】幼児教育学科	20
1. 学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー	
2. 「(期末) 授業アンケート」結果の概要・分析と学科の課題・改善方策	
【3】経営情報学科	27
1. 学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー	
2. 「(期末) 授業アンケート」結果の概要・分析と学科の課題・改善方策	
【4】福祉学科	36
1. 学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー	
2. 「(期末) 授業アンケート」結果の概要・分析と学科の課題・改善方策	
【5】専攻科食物栄養専攻	42
1. 専攻科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー	
2. 「(期末) 授業アンケート」結果の概要・分析と専攻科の課題・改善方策	
【参考資料】「(2015～2017年度) 期末の授業アンケート 集計結果」	47

はじめに

平成 26 年度、文部科学省は、「国として進めるべき大学教育改革を一層推進するため、教育再生実行会議等で示された新たな方向性に合致した先進的な取組みを実施する大学を支援することを目的」として、「大学教育再生加速プログラム」（以下、AP）事業を新たにスタートさせた。

富山短期大学は平成 26 年度に、「テーマⅡ：学修成果の可視化」分野において、短期大学では唯一選定された。

1. 富山短期大学が目指しているもの

AP（テーマⅡ）事業で富山短期大学が目指しているのは、「学修成果の可視化」によって、可視化されたデータ（エビデンス）に基づいて「三つの方針」を検証し、授業改善・学修改善・教育課程の改善等のための PDCA サイクルをルーティン化すること、併せて、情報公開によって対外的説明責任を果たすことに他ならない。【参考 3】

2. 「学修成果」

「学修成果」は、ディプロマ・ポリシー（以下、DP）において規定されている。

DP では、本学が育成する人材像とその人材が身に付けるべき「5 つの力」を規定。この「5 つの力」に基づいて、カリキュラム・ポリシー（以下、CP）では、「学修成果の 5 つの基準」を定め、全学・各学科・各科目において具体的な内容を規定している。

また、全学的なベンチマークとして、「5 つの基準」に基づく「身に付けるべき 17 の資質・能力」を定めている。

3. 「学修成果の可視化」と DP の検証

「学修成果の可視化」は、教員による「学修成果」の 5 つの基準別成績評価と、学生による「学修成果」別到達度・成長度の自己評価とによっている。

学生は、「（期末）授業アンケート」で、5 つの基準別「学修成果」の到達度を自己評価すると共に、「新入生アンケート」・「学修行動・生活調査」において、「17 の資質・能力」の到達度（同世代の人間との比較）と（入学してからの）成長度を自己評価している。

これらの可視化されたデータから、所期の教育成果が上がっているか否か、また教育・授業の改善効果が出ているか否か、DP の検証を行うことができる。

4. CP・シラバスの検証と教育課程の改善・授業改善のための「（期末）授業アンケート」【参考 4】

CP の検証と教育課程の改善は、「（期末）授業アンケート」結果の分析に基づいて行う。

各学科の CP では、「学修成果」の 5 つの基準別に教育内容、教育・学修方法、評価基準・方法を定め、それに基づいて、各授業科目のシラバスが作成されている。

「（期末）授業アンケート」では、「学修成果」別到達度の自己評価の他に、授業の方法・工夫、授業内容の効果・成果、評価基準の明確さ、学生本人の学修行動・意欲等について評価される。

授業科目毎に、この「（期末）授業アンケート」を集計・分析すれば、シラバスの検証が可能となる。

この検証結果から、すべての専任教員は授業科目毎に毎期末、「授業改善レポート」を作成し、それらの一部が『授業改善事例集』に纏められ、教員間で共有が図られている。

また、学科・全学単位で「（期末）授業アンケート」を集計・分析すれば、CP の検証が可能となる。

5. 「2018 年度 教育課程改善レポート」

AP 事業の補助金を得て、平成 27（2015）年度から「学修成果の可視化」のための各種調査を実施してきた結果、平成 29（2017）年度で 3 年分のデータが蓄積された。そこで、3 年分の「（期末）授業アンケート」を集計・分析して CP の検証を行い、今後の課題・改善方策をまとめたのが本レポートである。

【参考 1】中教審大学分科会将来構想部会「中間まとめ」 (H30.6.28)

3. 教育の質の保証と情報公表

(1) 教学マネジメントの確立とその前提としての学修成果の可視化

学長のリーダーシップの下で、「三つの方針」に基づく体系的で組織的な大学教育を、学位を与える課程（プログラム）共通の考え方や尺度（アセスメント・ポリシー）を踏まえた適切な PDCA など点検・評価を通じて不断の改善に取り組むこと（「教学マネジメント」の確立）。

(2) 情報公表

教学マネジメントの確立に当たっては、学生の学修成果に関する情報を的確に把握・測定し、教育活動の見直し等に適切に活用する。また、各大学が地域社会や企業等の大学の外部からの声や期待を意識し、積極的に説明責任を果たしていくという観点からも、大学全体の教育成果の可視化の取組を促進し、公表する。

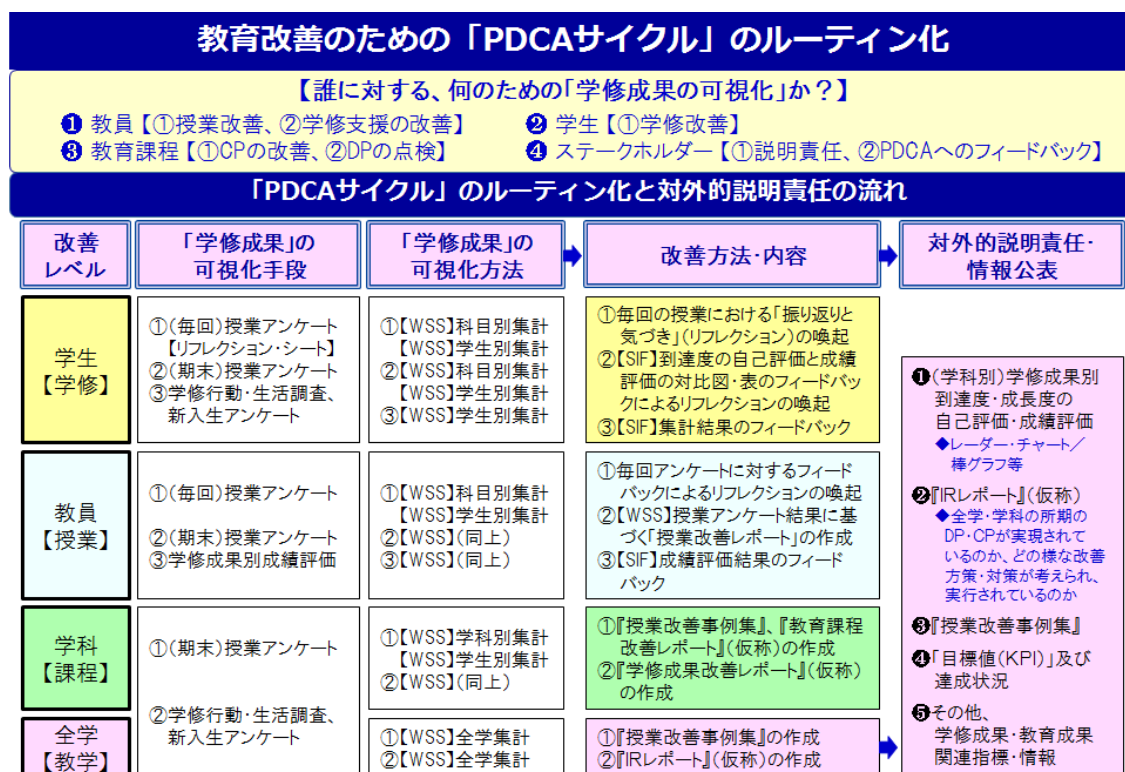
【参考2】短期大学基準協会：(第3期) 認証評価の方針

学習成果を焦点にした教育の質保証

教育の質保証は、学習成果を焦点にした三つの方針の実践・実行の成果を定量的及び定性的に査定（アセスメント）し、見付けた課題を改善する仕組みを実行していくことで確保することができる。

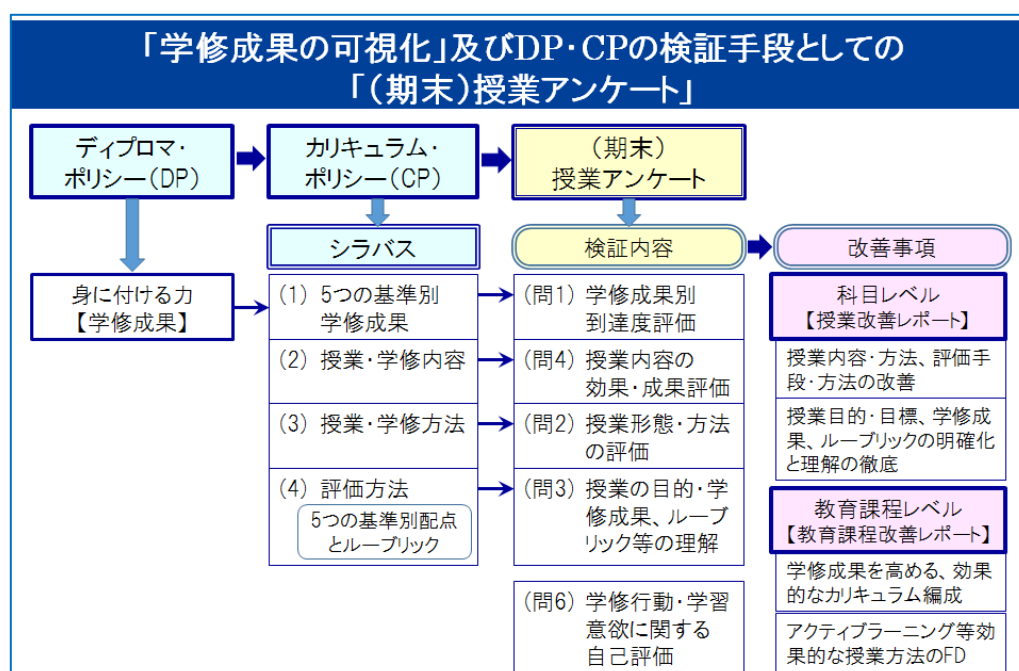
内部質保証とは、学習成果を焦点にした機関全体を査定する仕組みと、三つの方針や学習支援を充実させるための PDCA サイクルを稼働させること。学習成果とは、「何を学んで、何を身に付けて、何が出来ようになるか」ということを事前に表明し、教育課程の修了時に獲得するもの。

【参考3】教育改善のための「PDCA サイクル」のルーティン化



【注】WSS=Webシラバス・システムの略、SIF=Student Information File(学生情報ファイル・システム)の略、IR=Institutional Researchの略

【参考4】「学修成果の可視化」及びDP・CPの検証手段としての「(期末)授業アンケート」



I. 「(2015～2017 年度) (期末) 授業アンケート」に見る教育成果と課題 (全体概要) (専攻科を除く 4 学科合計)

1. 教育成果と課題

(1) 2015～2017 年度入学生の比較に見る改善の進展

- ① ほぼすべての設問項目において、年を追うにつれて学生の評価が高まっている。
特に、「学修成果」の到達度 (問 1)、授業に対する総合評価 (問 5) において顕著。
これは、2015 (平成 27) 年度から本格化した授業改善・教育改善の効果が、大学全体としては表れているものと考えられる。
- ② 但し、1・2 年次で比較すると、概して、「学修成果」の到達度自己評価等、2 年次になると低下する傾向が見られる。これは当然、2 年次には高度かつより専門的な内容のカリキュラム編成が行われているためであろう。
それでも、1 年次生・2 年次生の (問 1)・(問 5) の推移をみると、着実に改善している。

(2) 設問別特徴

- ① (問 1) の「学修成果」到達度の自己評価で、最も高いのが知識 (LO1)、技能 (LO2)、主体的学び (LO4)。低いのが、思考力・判断力・表現力 (LO3) と社会性・人間性 (LO5)。
これらを如何に高めるかが、全学的な課題であろう。
- ② (問 2) の「授業形態・方法の工夫」で最も評価が高いのが、(1)「教材の工夫」と(2)「授業中に学生の意見・考えを求める」。
2 年次になって高まるのが、(3)「グループワーク等の参加・協働学習」、(4)「体験的学習」、(5)「小テスト・レポート課題」、(6)「適切なコメント等を付した課題等の返却」。
2 年次になるとやや高まるが、全般的に低いのが(8)「個別指導・補習」。
顕著な改善が見られるのが、(7)「毎回の授業アンケートに関するフィードバック」。
この (問 2) に関しては、多くの項目で 2 年次の評価が高まっている。これもカリキュラム編成によるものであろうが、1 年次においても工夫を要するか検討が必要。
- ③ (問 3) の「授業目的・目標等の理解」では、(1)「授業の目的」は良く理解されているようである。
それに対して、(3)「成績評価の方法・ルーブリック (評価基準)」に関する理解が低い。
学習意欲を高める上で、明確な学習目的・目標 (ゴール) は欠かせない。明確な学習目的・目標 (ゴール) を設定するためにも、「授業の目的・目標 (学修成果)」と「成績評価の方法・基準」の理解を徹底させることが不可欠であろう。そのためにも、学科単位で「ルーブリック」を明確化・具体化することが必要。
- ④ (問 4) の「授業の効果・成果」では、(2)「将来の職業に関連する知識・技能の獲得」、(1)「興味・関心の喚起」が最も高い評価。最も低いのが、(3)「文章を書く力」、(4)「分かり易く話す・説明する力」の獲得。従って、(5)「論理的思考力」、(6)「課題発見・解決力」の獲得も低くなっている。
これは、(問 1) の「学修成果」到達度の自己評価と符合している。
「論理的思考力」・「課題発見・解決力」をどのように育成するか、授業内容・方法の検討が必要。
- ⑤ (問 6) の「学修行動・意欲」の自己評価では、(3)「課題・宿題の遂行」、(8)「良い成績のための努力」が最も高い。(4)「授業中の質問・発言」、(5)「時間外での教員への質問・相談」が低い。
しかしながら、(6)「時間外での友達との協働学習」や(7)「自主的学習」が比較的高い自己評価となっている。
(2)「授業外学修時間」は改善しているものの、依然低い。「授業外学修時間」を増やすには、予習・復習課題を課すことが効果的。従って、(6)「時間外での友達との協働学習」を奨励し、予習・復習課題を自主的・主体的学びに繋げていくような工夫が必要。

2. インプリケーションと課題

(1) 「学修成果」を高めるには「授業目的・目標等の理解」と「興味・関心の喚起」が重要

相関マトリックス（資料3）を見ると、「学修成果」の到達度自己評価（問1）は、（問3）の（1）「授業目的」、（2）「学修成果（獲得出来る力）」、（3）「評価基準」（＝学修成果）、（4）「授業内容」の理解、ならびに（問4（1））「授業に対する興味・関心の喚起」と高い相関にある。

当然、「授業の目的・目標」が明確になれば、「授業に対する興味・関心」が高まり、「授業内容に関する理解」を深めて、「学修成果」の高い自己評価に繋がる。

それは最終的に、「授業に対する総合評価」を高める結果となるようだ。

(2) 思考力を高めるアクティブ・ラーニングの効果

相関マトリックスを見ると、「書く」・「話す・説明する」といったアクティブ・ラーニング型授業が「分析的・論理的思考力」を高め、その結果として「課題発見・解決力」や「社会性・人間性」を高めることに繋がっているようだ。

「専門的知識」や「技能」のみならず、それらを応用して「考える」力・「課題発見・解決」にあたれる力を伸ばすには、自らの考えを表現し、あるいは他者の考えを鏡として自らの考えを相対化・客観化できる、アクティブ・ラーニング型授業の更なる工夫と充実が課題と言える。

(3) 学習意欲を喚起するには

「良い成績のために努力する」（問6(8)）の自己評価が高い学生の、「学修成果」到達度の自己評価は比較的高い。

こうした学習意欲を高めるには、興味・関心を高めて自主的な学びを促すことが効果的。

そのためには、学生の興味・関心を喚起する授業内容・方法の工夫と共に、課題や宿題を与えきちんとやらせる（問6(3)）、協働学習を行わせる（問6(7)）などが効果的とみられる。

3. その他の検討課題

(1) 「カリキュラム・マップ」による、授業科目の「学修成果」の検討

2018年度入学生に対する全ての開講科目の「学修成果（LO1～LO5）」別配点を集計した「カリキュラム・マップ」（資料4）を見ると、極端にLO5（人間性・社会性）の配点が小さい学科がある。この学科では、他学科に比べてLO5の到達度自己評価が小さくなっている。その背景の一つとして、LO5の育成に配慮した授業科目が少ないことが考えられる。

カリキュラム編成の問題というよりは、各授業科目において、「協調性・協働力」を育成する、あるいは「地域・社会貢献意識」や「社会的責任・倫理観」を高める工夫が必要であろう。

(2) 「(LO3) 思考力・判断力・表現力」をどのように育て、評価するのか

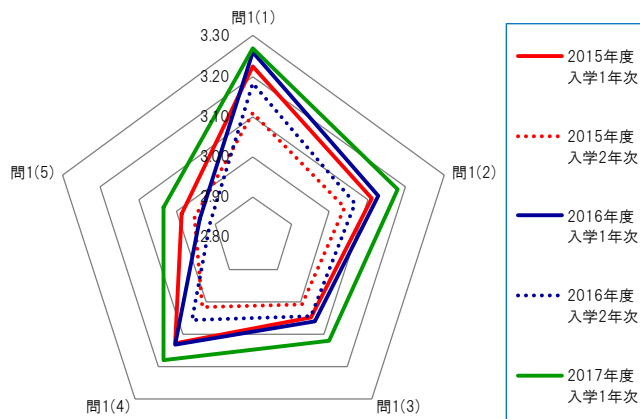
「カリキュラム・マップ」を見ると、一部の学科を除けば、LO3（思考力・判断力・表現力）に関する配点は比較的大きい。にもかかわらず、その到達度に関する自己評価が低いのは、何故だろうか。

相関マトリックスからのインプリケーションについては、すでに触れたが、そもそもLO3（思考力・判断力・表現力）をどのように育てたらいいのか、また、それをどのような手段でどのように評価したらいいのかについて、今後検討していく必要があるだろう。

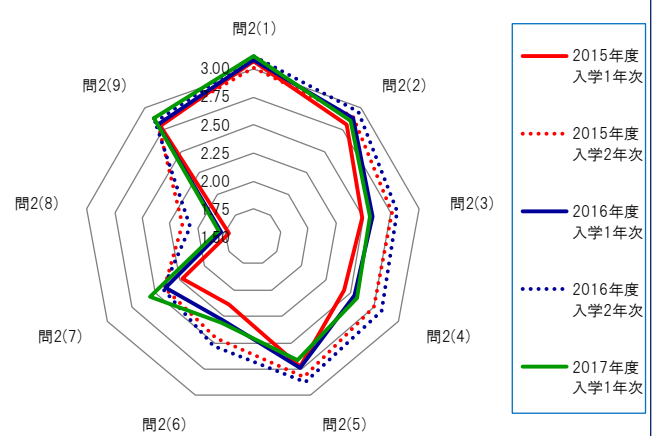
(資料1) 「(期末)授業アンケート」の質問項目	
調査項目	【選択肢】
I. 授業で獲得できた「学修成果」に関する自己評価	
問1 この授業では、授業を通じて獲得できる力(＝「学修成果」)を到達目標として説明してありますが、皆さんは、どの程度「学修成果」を獲得したと自分で評価しますか。下記の「学修成果」について自己評価してください。なお、該当しない「学修成果」につきましては、「E. 全く身に付かなかった」評価でも構いません。	
(1) 授業で説明された知識を理解し、身に付けることができた。 (2) 授業で目指された、実践や表現、分析等のための技能(スキル)を身に付けることができた。 (3) 授業で学修した知識・技能を活用して、当該分野の課題を解決あるいは表現・実践できるようになった。 (4) 当該分野に対する関心が高まり、自ら主体的に学ぶ意欲、あるいは課題に取り組む意欲が増した。 (5) 他者や社会、自然・環境との関わりの中に生きる人間として必要な社会性・人間性が身に付いた。	◆5段階評価 A 大いに身に付いた B いくらか身に付いた C どちらともいえない D あまり身に付かなかった E まったく身に付かなかった
II. 授業形態・方法	
問2 この授業で、教員はどのような工夫をしていましたか。	
(1) 教材(配布資料、板書、スライド等)が工夫されていた。 (2) 授業中に、学生の意見や考えを求められた。 (3) グループワークやディスカッションなど、学生の参加・協働学習の機会があった。 (4) 体験的な学習(実習、実験、フィールドワーク等)の機会があった。 (5) 期末試験の他に、小テストやレポートなどの課題が出された。 (6) 課題などの提出物が、適切なコメントが付されて返却された。 (7) 毎回の授業アンケート(「質問・意見」など)に関する解説・回答などフィードバックがあった。 (8) 個別指導や補習が行われた。 (9) その他、「学修成果」を高める工夫がなされた。	A 大いにあった B いくらかあった C どちらともいえない D あまりなかった E まったくなかった
III. 学習意欲を高める授業内容・方法の工夫	
問3 この授業の目的や「学修成果」、成績評価の方法・基準、内容についてどの程度理解できましたか。	
(1) 「授業の目的」が明確で、理解できた。 (2) 「学修成果」(授業を通じて獲得できる力)について説明があり、理解できた。 (3) 「成績評価の方法」と「ルーブリック(評価基準)」の説明があり、理解できた。 (4) 「授業の内容」は、分かりやすく理解できた。	A 大いに理解できた B いくらか理解できた C どちらともいえない D あまり理解できなかった E まったく理解できなかった
問4 この授業の効果・成果について、どのように評価しますか。	
(1) 授業の内容・方法は、自分の興味・関心を喚起するものだった。 (2) 授業の内容・方法は、将来の職業に関連する知識や技能・技術を獲得する上で役立った。 (3) 授業の内容・方法は、人に分かりやすい文章を書く力を獲得する上で役立った。 (4) 授業の内容・方法は、人に分かりやすく話す・説明する力を獲得する上で役立った。 (5) 授業の内容・方法は、ものごとを分析的・論理的に考える力を獲得する上で役立った。 (6) 授業の内容・方法は、課題を見つけ、解決方法を考える力を獲得する上で役立った。 (7) 授業の内容・方法は、社会に出ていく上で必要な社会性・人間性を高める上で役立った。 (8) この授業を評価するにあたって、上記の項目の中で最も重要と思うものはどれですか。 (9) この授業を評価するにあたって、上記の項目の中で2番目に重要と思うものはどれですか。 (10) この授業を評価するにあたって、上記の項目の中で3番目に重要と思うものはどれですか。	A 大変役立った B いくらか役立った C どちらともいえない D あまり役立たなかった E まったく役立たなかった ((1)～(7))の内の番号を選択
IV. 総合評価	
問5 あなたにとって、この授業は、総合的にみて良かったと思いますか。	A 大変良かった ～ E まったく良くなかった
V. 学修行動【＝学習意欲の自己評価】	
問6 あなた自身は、この授業にどのように取り組みましたか。	
(1) この授業の欠席回数は何回ですか。 (2) 授業1回あたりの、授業外学習(予習・復習・宿題・試験対策等)の時間はどれくらいですか。 (3) 授業で出された課題や宿題はきちんと行った。 (4) 授業中に、質問や発言をした。 (5) 授業時間以外に、担当教員に質問したり相談をした。 (6) 予習・復習・宿題・試験対策等、友だちと一緒に学習した。 (7) 授業で分からなかったこと、興味を持ったことは、自主的に調べた。 (8) 良い成績をとるために努力した。	◆ A 0回 ～ E 4回以上 ◆ A 2時間以上 ～ E 0分 【30分刻み】 A 積極的に行った B 行った C どちらともいえない D あまり行わなかった E まったく行わなかった
VI. 自由記述	
問7 この授業で良かったと思う点を、自由に記述してください。	【テキスト・ボックス】
問8 この授業で改善してほしいと思う点を、自由に記述してください。	【テキスト・ボックス】
問9 その他、教室、設備・施設等も含めて、この授業に対して要望があれば、自由に記述してください。	【テキスト・ボックス】

(資料2) 「(2015～2017年度)(期末)授業アンケート」集計結果(4学科合計(除く専攻科))

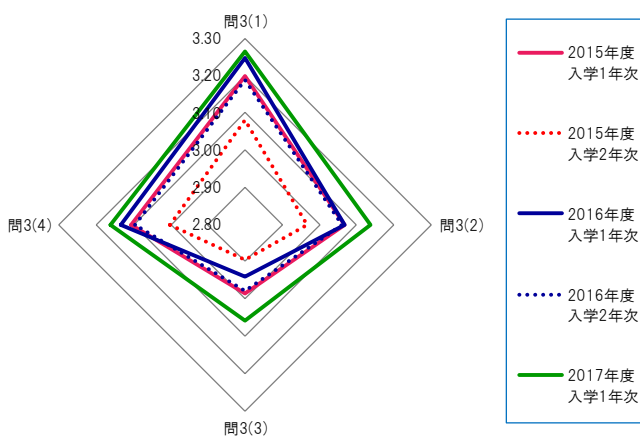
(問1)学修成果獲得状況自己評価



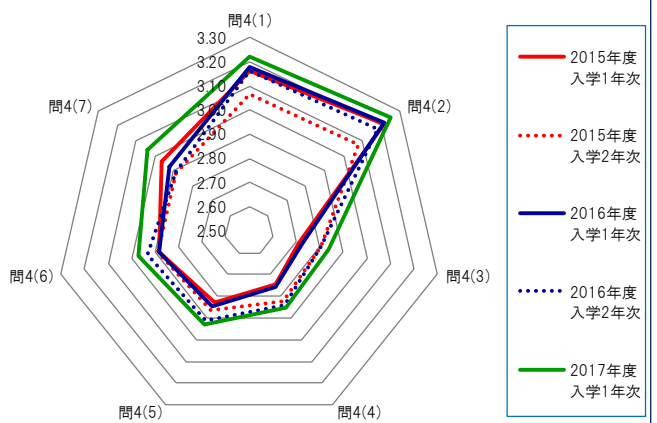
(問2)授業における工夫



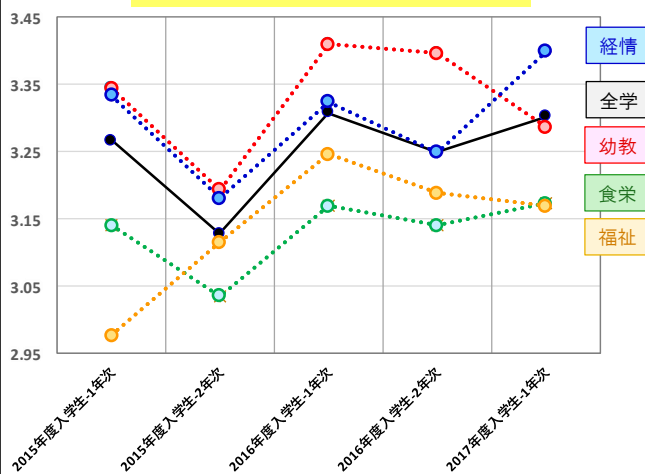
(問3)授業目的・学修成果等の理解



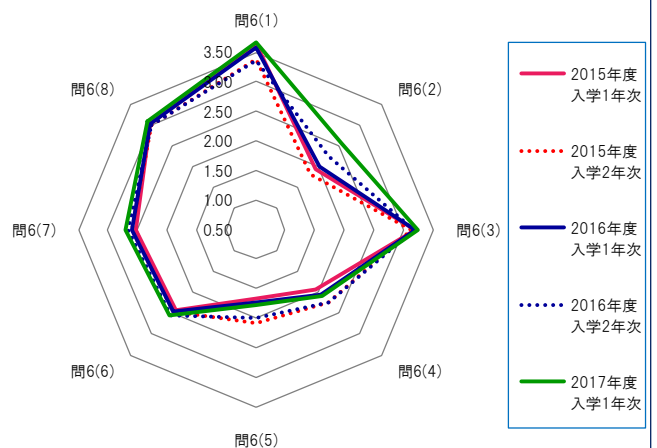
(問4)授業の効果・成果



(問5)授業に関する総合評価



(問6)学修行動・学習意欲等の自己評価



(資料3)

(2015・2016・2017年度入学生)「(期末)授業アンケート」結果の相関マトリックス

	問1 (1)	問1 (2)	問1 (3)	問1 (4)	問1 (5)	問2 (1)	問2 (2)	問2 (3)	問2 (4)	問2 (5)	問2 (6)	問2 (7)	問2 (8)	問2 (9)	問3 (1)	問3 (2)	問3 (3)	問3 (4)	問4 (1)	問4 (2)	問4 (3)	問4 (4)	問4 (5)	問4 (6)	問4 (7)	問5	問6 (1)	問6 (2)	問6 (3)	問6 (4)	問6 (5)	問6 (6)	問6 (7)	問6 (8)
問1(1)	1.00	0.75	0.69	0.68	0.55	0.47	0.32	0.25	0.28	0.25	0.24	0.22	0.18	0.47	0.64	0.59	0.52	0.61	0.63	0.57	0.40	0.42	0.46	0.48	0.47	0.59	0.07	0.14	0.38	0.22	0.20	0.27	0.34	0.43
問1(2)	0.75	1.00	0.77	0.70	0.61	0.44	0.32	0.29	0.33	0.27	0.27	0.24	0.23	0.47	0.59	0.58	0.52	0.57	0.58	0.55	0.46	0.47	0.50	0.53	0.50	0.55	0.06	0.15	0.37	0.25	0.24	0.29	0.35	0.41
問1(3)	0.69	0.77	1.00	0.73	0.63	0.44	0.34	0.30	0.34	0.28	0.29	0.27	0.26	0.48	0.57	0.58	0.53	0.56	0.58	0.54	0.49	0.50	0.52	0.55	0.51	0.53	0.06	0.15	0.36	0.27	0.26	0.31	0.36	0.40
問1(4)	0.68	0.70	0.73	1.00	0.63	0.46	0.34	0.28	0.31	0.27	0.27	0.26	0.22	0.50	0.60	0.59	0.54	0.59	0.63	0.57	0.45	0.47	0.51	0.55	0.51	0.57	0.07	0.16	0.38	0.24	0.23	0.31	0.39	0.44
問1(5)	0.55	0.61	0.63	0.63	1.00	0.41	0.37	0.36	0.34	0.24	0.30	0.28	0.28	0.46	0.48	0.50	0.47	0.49	0.50	0.46	0.54	0.55	0.53	0.54	0.65	0.46	0.05	0.12	0.29	0.30	0.29	0.28	0.32	0.34
問2(1)	0.47	0.44	0.44	0.46	0.41	1.00	0.39	0.27	0.24	0.31	0.34	0.35	0.21	0.50	0.51	0.49	0.46	0.50	0.48	0.46	0.38	0.39	0.44	0.44	0.42	0.49	0.04	0.13	0.30	0.17	0.18	0.25	0.29	0.30
問2(2)	0.32	0.32	0.34	0.34	0.37	0.39	1.00	0.60	0.40	0.33	0.40	0.31	0.30	0.39	0.34	0.35	0.33	0.35	0.34	0.32	0.41	0.44	0.37	0.38	0.38	0.33	0.03	0.12	0.26	0.40	0.29	0.26	0.29	0.24
問2(3)	0.25	0.29	0.30	0.28	0.36	0.27	0.60	1.00	0.64	0.32	0.44	0.27	0.37	0.34	0.25	0.27	0.27	0.28	0.27	0.25	0.41	0.44	0.32	0.34	0.37	0.27	0.04	0.07	0.21	0.45	0.35	0.25	0.23	0.17
問2(4)	0.28	0.33	0.34	0.31	0.34	0.24	0.40	0.64	1.00	0.37	0.45	0.28	0.43	0.37	0.29	0.31	0.30	0.31	0.31	0.28	0.36	0.37	0.32	0.36	0.32	0.30	0.01	0.11	0.24	0.39	0.37	0.29	0.27	0.20
問2(5)	0.25	0.27	0.28	0.27	0.24	0.31	0.33	0.32	0.37	1.00	0.48	0.32	0.32	0.34	0.27	0.28	0.30	0.26	0.25	0.24	0.29	0.29	0.29	0.30	0.26	0.23	-0.01	0.22	0.38	0.23	0.25	0.31	0.31	0.24
問2(6)	0.24	0.27	0.29	0.27	0.30	0.34	0.40	0.44	0.45	0.48	1.00	0.61	0.54	0.43	0.26	0.30	0.32	0.28	0.27	0.24	0.39	0.38	0.37	0.37	0.32	0.28	-0.01	0.17	0.23	0.38	0.43	0.34	0.33	0.20
問2(7)	0.22	0.24	0.27	0.26	0.28	0.35	0.31	0.27	0.28	0.32	0.61	1.00	0.48	0.44	0.27	0.31	0.35	0.29	0.26	0.24	0.32	0.32	0.38	0.35	0.30	0.28	0.00	0.12	0.16	0.28	0.35	0.31	0.30	0.18
問2(8)	0.18	0.23	0.26	0.22	0.28	0.21	0.30	0.37	0.43	0.32	0.54	0.48	1.00	0.40	0.18	0.24	0.26	0.20	0.20	0.16	0.35	0.34	0.32	0.32	0.27	0.20	-0.01	0.13	0.14	0.47	0.57	0.37	0.33	0.17
問2(9)	0.47	0.47	0.48	0.50	0.46	0.50	0.39	0.34	0.37	0.34	0.43	0.44	0.40	1.00	0.55	0.56	0.55	0.55	0.52	0.47	0.44	0.45	0.50	0.52	0.48	0.51	0.03	0.16	0.32	0.30	0.31	0.35	0.39	0.38
問3(1)	0.64	0.59	0.57	0.60	0.48	0.51	0.34	0.25	0.29	0.27	0.26	0.27	0.18	0.55	1.00	0.73	0.63	0.69	0.68	0.62	0.41	0.43	0.49	0.53	0.50	0.63	0.06	0.15	0.37	0.19	0.17	0.27	0.35	0.42
問3(2)	0.59	0.58	0.58	0.59	0.50	0.49	0.35	0.27	0.31	0.28	0.30	0.31	0.24	0.56	0.73	1.00	0.74	0.66	0.63	0.59	0.46	0.48	0.53	0.55	0.51	0.58	0.04	0.15	0.36	0.23	0.22	0.30	0.37	0.41
問3(3)	0.52	0.52	0.53	0.54	0.47	0.46	0.33	0.27	0.30	0.30	0.32	0.35	0.26	0.55	0.63	0.74	1.00	0.62	0.57	0.52	0.45	0.46	0.52	0.53	0.49	0.51	0.03	0.16	0.33	0.23	0.23	0.30	0.35	0.38
問3(4)	0.61	0.57	0.56	0.59	0.49	0.50	0.35	0.28	0.31	0.26	0.28	0.29	0.20	0.55	0.69	0.66	0.62	1.00	0.67	0.61	0.44	0.46	0.50	0.53	0.52	0.66	0.05	0.12	0.34	0.21	0.19	0.24	0.33	0.40
問4(1)	0.63	0.58	0.58	0.63	0.50	0.48	0.34	0.27	0.31	0.25	0.27	0.26	0.20	0.52	0.68	0.63	0.57	0.67	1.00	0.70	0.47	0.48	0.53	0.56	0.54	0.67	0.08	0.13	0.36	0.23	0.21	0.27	0.37	0.42
問4(2)	0.57	0.55	0.54	0.57	0.46	0.46	0.32	0.25	0.28	0.24	0.24	0.24	0.16	0.47	0.62	0.59	0.52	0.61	0.70	1.00	0.45	0.47	0.51	0.54	0.53	0.59	0.08	0.13	0.34	0.18	0.16	0.25	0.32	0.39
問4(3)	0.40	0.46	0.49	0.45	0.54	0.38	0.41	0.41	0.36	0.29	0.39	0.32	0.35	0.44	0.41	0.46	0.45	0.44	0.47	0.45	1.00	0.80	0.66	0.63	0.62	0.42	0.03	0.15	0.28	0.36	0.35	0.31	0.34	0.29
問4(4)	0.42	0.47	0.50	0.47	0.55	0.39	0.44	0.44	0.37	0.29	0.38	0.32	0.34	0.45	0.43	0.48	0.46	0.46	0.48	0.47	0.80	1.00	0.68	0.66	0.65	0.44	0.03	0.14	0.29	0.37	0.35	0.31	0.35	0.30
問4(5)	0.46	0.50	0.52	0.51	0.53	0.44	0.37	0.32	0.32	0.29	0.37	0.38	0.32	0.50	0.49	0.53	0.52	0.50	0.53	0.51	0.66	0.68	1.00	0.76	0.62	0.48	0.03	0.16	0.30	0.29	0.31	0.33	0.38	0.34
問4(6)	0.48	0.53	0.55	0.55	0.54	0.44	0.38	0.34	0.36	0.30	0.37	0.35	0.32	0.52	0.53	0.55	0.53	0.53	0.56	0.54	0.63	0.66	0.76	1.00	0.65	0.51	0.04	0.16	0.32	0.30	0.31	0.34	0.39	0.36
問4(7)	0.47	0.50	0.51	0.51	0.65	0.42	0.38	0.37	0.32	0.26	0.32	0.30	0.27	0.48	0.50	0.51	0.49	0.52	0.54	0.53	0.62	0.65	0.62	0.65	1.00	0.49	0.05	0.12	0.29	0.28	0.27	0.28	0.33	0.34
問5	0.59	0.55	0.53	0.57	0.46	0.49	0.33	0.27	0.30	0.23	0.28	0.28	0.20	0.51	0.63	0.58	0.51	0.66	0.67	0.59	0.42	0.44	0.48	0.51	0.49	1.00	0.08	0.13	0.36	0.22	0.21	0.26	0.32	0.41
問6(1)	0.07	0.06	0.06	0.07	0.05	0.04	0.03	0.04	0.01	-0.01	-0.01	0.00	-0.01	0.03	0.06	0.04	0.03	0.05	0.08	0.08	0.03	0.03	0.03	0.04	0.05	0.08	1.00	0.01	0.13	0.05	0.03	0.05	0.06	0.15
問6(2)	0.14	0.15	0.15	0.16	0.12	0.13	0.12	0.07	0.11	0.22	0.17	0.12	0.13	0.16	0.15	0.15	0.16	0.12	0.13	0.13	0.15	0.14	0.16	0.16	0.12	0.13	0.01	1.00	0.29	0.15	0.18	0.30	0.32	0.26
問6(3)	0.38	0.37	0.36	0.38	0.29	0.30	0.26	0.21	0.24	0.38	0.23	0.16	0.14	0.32	0.37	0.36	0.33	0.34	0.36	0.34	0.28	0.29	0.30	0.32	0.29	0.36	0.13	0.29	1.00	0.26	0.22	0.38	0.43	0.51
問6(4)	0.22	0.25	0.27	0.24	0.30	0.17	0.40	0.45	0.39	0.23	0.38	0.28	0.47	0.30	0.19	0.23	0.23	0.21	0.23	0.18	0.36	0.37	0.29	0.30	0.28	0.22	0.05	0.15	0.26	1.00	0.67	0.44	0.43	0.29
問6(5)	0.20	0.24	0.26	0.23	0.29	0.18	0.29	0.35	0.37	0.25	0.43	0.35	0.57	0.31	0.17	0.22	0.23	0.19	0.21	0.16	0.35	0.35	0.31	0.31	0.27	0.21	0.03	0.18	0.22	0.67	1.00	0.51	0.47	0.29
問6(6)	0.27	0.29	0.31	0.31	0.28	0.25	0.26	0.25	0.29	0.31	0.34	0.31	0.37	0.35	0.27	0.30	0.30	0.24	0.27	0.25	0.31	0.31	0.33	0.34	0.28	0.26	0.05	0.30	0.38	0.44	0.51	1.00	0.61	0.45
問6(7)	0.34	0.35	0.36	0.39	0.32	0.29	0.29	0.23	0.27	0.31	0.33	0.30	0.33	0.39	0.35	0.37	0.35	0.33	0.37	0.32	0.34	0.35	0.38	0.39	0.33	0.32	0.06	0.32	0.43	0.43	0.47	0.61	1.00	0.54
問6(8)	0.43	0.41	0.40	0.44	0.34	0.30	0.24	0.17	0.20	0.24	0.20	0.18	0.17	0.38	0.42	0.41	0.38	0.40	0.42	0.39	0.29	0.30	0.34	0.36	0.34	0.41	0.15	0.26	0.51	0.29	0.29	0.45	0.54	1.00

(資料4)

(2018年度入学生履修科目)カリキュラム・マップ

【注】「カリキュラム・マップ」とは、2018年度入学生に対する全ての開講科目の「学修成果(LO1～LO5)」別配点を集計したもの。

【食物栄養学科】



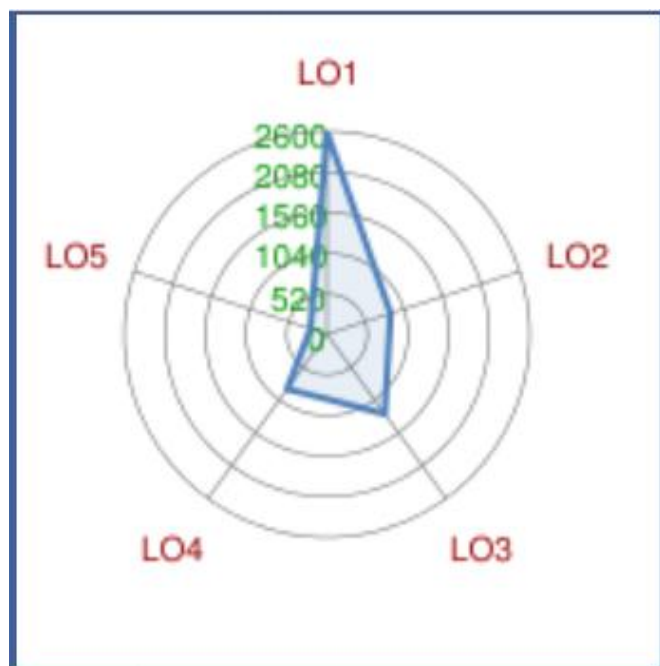
(LO)	LO1	LO2	LO3	LO4	LO5
配点計	2,868	946	497	946	853
(%)	46.9	15.5	8.1	15.5	14.0

【幼児教育学科】



(LO)	LO1	LO2	LO3	LO4	LO5
配点計	2,388	1,377	1,409	1,152	923
(%)	32.9	19.0	19.4	15.9	12.7

【経営情報学科】



(LO)	LO1	LO2	LO3	LO4	LO5
配点計	2,588	858	1,262	869	223
(%)	44.6	14.8	21.8	15.0	3.8

【福祉学科】



(LO)	LO1	LO2	LO3	LO4	LO5
配点計	3,190	1,025	1,290	900	790
(%)	44.3	14.2	17.9	12.5	11.0

Ⅱ. 学科・専攻科の「教育課程改善レポート」(骨子)

(1) 食物栄養学科

1. 「期末授業アンケート」結果の概要・分析

- ① (問 1) では、2016 年度入学生において自己評価が系統的に低い、入試倍率が他年度に比べ突出して高く自己評価に厳しい。2015 年度入学生の自己評価が妥当なバランスであると思われる。
- ② (問 2) 授業形態・方法の各設問は、ほぼ学年進行とともに向上し成果がみられる。ただし実験・実習より講義の比重の高い 1 年後期は、レポート等課題が少なくなっている。
- ③ (問 4) の授業効果・成果については、設問(1)(2)専門知識・技能が高い。それに対し、(3)～(7)のスコアが若干ではあるが低めである。
- ④ (問 5) 総合評価は、2015 年度入学生の評価が低い、定員 80 名で 103 名入学のため、1 クラス 40 名を超過し無理が生じたと思われる。2016 年度入学生にはよい評価が得られた。
- ⑤ (問 6) 2 年後期まで向上しており、2 年にわたるモチベーションの維持に成功しているといえる。ただし、2 年後期の欠席は就職時期の遅さが影響。1 年後期は、自宅学習時間の低下等がみられる。
- ⑥ 2017 年度入学生において、後期は前期に比べ全般的にスコアが低下。ただし、1 年前期は他年度よりスコアが高く、1 年後期は他の年度の間で、特に悪化したわけではない。

2. 課題と改善方策

- ① 1 年後期ではスコアの低下する設問が、他の学期に比べて多い。他の学期に比べ、実験・実習の割合が少ない分、課題提出・返却、自宅学習時間の増加等に注意する。
- ② 1 年後期は時間割が過密であり、できる範囲での時間割の過密回避を検討。
- ③ (問 4) の設問(3)～(7)が、(1)(2)に比べ若干低めであり、表現力、分析力等向上のための授業工夫を継続する。

3. 総括

- ① 入学年度ごとにデータが異なる部分の一部は、その年次の入学生に特有なものと判断する。
- ② 1 年後期は、専門科目、教養科目、教職科目の別に関わらず、課題提出・返却、自宅学習時間の改善に取り組む。表現力、分析力等向上の授業工夫は継続する。
- ③ 過密な時間割の影響も考えられるため、1 年後期を中心に可能な範囲で時間割の改善を検討する。

(2) 幼児教育学科

1. 「期末授業アンケート」結果の概要・分析

- ① (問 1) の、学修成果の到達度自己評価は 4 学科中最も高い。特に、2 年次の LO5 の自己評価の上昇が顕著。これは、理解や技能が身に付くことで、社会性・人間性も身に付いたと自信を深めたからであろう。但し、2 年後期の、就職確定後の指導に工夫が必要。
- ② (問 2) からは、授業形態・方法の工夫が学修成果に結びついていることは見て取れる。
- ③ (問 3) は、授業目的や評価方法の理解が、学習意欲の向上につながっていることを示唆。
- ④ (問 4) からは、アクティブ・ラーニング型授業が増えた効果が見られる。
- ⑤ (問 5) も、4 学科中最も高い評価。但し、一部の科目で低い評価があるのは問題。
- ⑥ 2015 年度入学生の評価が概して低かったのは、定員 80 名のところ、110 名の入学生があり、落ち着いた学習環境を用意できなかったことが背景にあるだろう。
- ⑦ 4 学科中最も少ない授業外学修時間の確保は、大きな課題。

2. 課題と改善方策

- ① 子どもに関わることがみえやすい科目については、評価が高くなる傾向にあり、関わりが見えにくい科目は評価が低くなる傾向にある。学修の必要性を理解させるための工夫が必要。
- ② 個別的な学修の時には、成果がみえやすいので評価が高くなるが、集団での学修になると評価が低くなる傾向がある。集団での学びを高めていく姿勢を身につけてほしい。
- ③ 得意で好きなことは積極的に学修するが、不得意なことにはなかなか取り組めない状況がみられる。
- ④ 「社会性・人間性」の成長が、学びに結びついていくことが、今後の一番の課題。

3. 総括

- ① 来年度から、より実践力のある幼稚園教諭・保育士を養成するために、教育課程が大幅に変更される。まず、この見直しの趣旨を、教員間で共通理解する必要がある。
- ② 実践への結びつきが見えにくい教養科目や本質に関わる科目では概して学習意欲が低い、アクティブ・ラーニング的な手法は有効。グループ活動での学修成果を高める工夫も必要。

(3) 経営情報学科

1. 「期末授業アンケート」結果の概要・分析

- ① (問 1) の学修成果の到達度評価は概して高い。しかし、毎年 LO5 の自己評価が低く、特に、2 年前期に下がり、後期は戻す傾向。社会性・人間性を高めるための工夫が必要。
- ② (問 2) では特に、教材の工夫や、小テスト・レポート等の面で授業の工夫が評価されている。
- ③ (問 3) では、「授業目的の理解」の評価が特に高く、「学修成果の理解」も高い傾向にあり、これらの理解が学生の学修成果の到達度評価の高い傾向と結びついていると推測できる。
- ④ (問 4) では、特に「興味・関心を喚起」と、「職業に関する知識・技能・技術獲得で役立つ」の評価が高く、これが学生の学修成果の高い到達度評価と結びついていると推測できる。
- ⑤ (問 5) は、1 年次に比べて 2 年前期の総合評価レベルが、概して低下している。これは学生が就活で現実社会の厳しさを経験する結果、自己評価レベルを厳しくしていると推測される。
- ⑥ (問 6) では、2017 年度入学生の評価が、2016 年度入学生に比べ大幅に改善している。教員の授業改善努力が、学修行動の改善に繋がっていると推測できる。

2. 課題と改善方策

- ① LO5 の評価レベルが特に低い。例えば、アクティブ・ラーニング型授業が多い「ビジネス実務・キャリア科目」などに比べて、「情報科目」で低い。協調性・協働力、人間性を高める工夫が必要。
- ② LO3 の評価レベルが低めの傾向。職業人としては「考える力」と「判断力」が必須なので、読解力や数学などの基礎学力の向上と共に、思考・判断力を向上させる工夫が必要。

3. 総括

- ① 学生の評価レベルは全体的に高い。これは、授業目的・授業内容・ルーブリック・成績評価などの明確化や、授業外学修時間と予習・復習の徹底で、学生の理解が深まっているためと推測される。
- ② 参加・協働学習を促すグループワーク等アクティブ・ラーニング型授業をより積極化する必要。
- ③ 学生の就活が主に 2 年前期に集中。また、1 年終了時に卒業単位数の約 75% 程度を取得。そのため、2 年次での学修意欲の低下が 2 年次の評価の低下に繋がる。2 年次での学修指導の工夫が必要。

(4) 福祉学科

1. 「期末授業アンケート」結果の概要・分析

福祉学科の学年・学期には、2 年次後期に資格試験対策にそれぞれ多くの時間を割いている。これらの試験対策では、学力によりグループに分かれるため、2 年次後期における諸評価の特異性につながるものと思われる。

- ① (問 1) は、他学科と比べて自己評価がやや低い。現場での判断力や実技の難しさを痛感することがこのような評価の原因となっているのではないかと推測される。
- ② (問 2) 2 年次後期の資格取得に向けた指導が評価されている。
- ③ (問 3) 学生に理解させる努力は行っているが、本項目の充実が福祉学科の課題の一つである。
- ④ (問 4) 福祉ならではの「社会性・人間性を高める上で役立った」ことが高く評価されている。
- ⑤ (問 5) 一進一退の様相である。2 年次後期の資格試験対策は、評価の分かれるところである。
- ⑥ (問 6) 欠席回数の増加と自宅学習の時間の少なさが課題となっている。

2. 課題と改善方策

- ① アルバイトでの時間拘束があることが推測される。まずは正しい生活リズムを確立させ、少しでも自宅学習の時間を確保させる意識付けが一番の対策のように感じられる。
- ② 資格取得のための 2 年後期のグループ別試験対策の取組みにより、介護福祉士の国家試験では全国の養成校の合格率とほぼ同じ成績(約 88%)を残すことができたが、グループ分けへの不満感を解消する努力を行っていく。
- ③ 福祉学科は 3 つの分野の教育課程があり、進路決定を急がせるのも難しく、一人ひとりに向き合いながらの進路指導が不可欠となっている。

3. 総括

- ① コミュニケーション力を裏づけするボランティア活動への積極的な参加と学びの充実を継続する。
- ② 自己研鑽のための総合的研究での、研究そのものの理解を深める取組みが重要と考える。
- ③ 地域社会の発展のための多方面で活躍できる人材を輩出するという教育課程の発展を目指す。

(5) 専攻科食物栄養専攻

1. 「期末授業アンケート」結果の概要・分析

2015～2017年度の期末授業アンケート結果を分析したところ、以下の点がわかった。

- ① 専攻科入学時から本科の教育に対する学生の意識が異なる。すなわち、学修成果に対する意識、学修成果等の理解、学修成果の獲得等において学生の評価に差があり、過去3年間において異なる母集団が入学している。
- ② 年を追うごとに、自己肯定感および教員の授業工夫への関心が高い学生が入学している。
- ③ 年を追うごとに、専攻科1年生の総合評価が上昇している。
- ④ 2年生において、学修成果や学修成果等の理解の評価が低下傾向にある。
- ⑤ 学習意欲の自己評価では、項目により大きく差はあるが、勤勉な学生がほとんどであり、評価は概ね良好である。
- ⑥ 学生が授業の効果や成果の評価が比較的高く、本学での教育の良さを実感しているように思われる。

2. 課題と改善方策

- ① 2年生になると、専門科目が増えて学習内容の難易度も高くなるため、授業の理解・習得で消化不良となる学生が増えている。これが学修成果や学修成果等の理解の評価を下げている可能性がある。
- ② FD・SD研修会では授業事例報告をしており、本学では教員ごとに担当授業における創意工夫。

3. 総括

本科では、管理栄養士という専門性の高い職種の人材育成に取り組んでいる。そのため、学習内容の難易度が高い専門科目が多くて学ぶことが無数にある中で、授業に対して総合的に見て概ねよいという評価を学生がしている。改善すべき点はまだまだあるが、教育の方向性は間違っていないと感じている。

Ⅲ. 学科・専攻科の教育理念・目標・「三つの方針」と教育成果・課題

【1】食物栄養学科

1. 学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

(1) 「5つの基準」別「学修成果」の具体的内容

【食物栄養学科が育成する人材像】

食物栄養学科では、以下の能力・姿勢を修得し、本学の卒業要件を満たした人に、短期大学士（食物栄養学）の学位を授与します。

【「育成する人材」に必要な力】

- ① 食の専門職に必要な食と健康に関する専門知識
- ② 食の専門職に必要な食と健康に関する専門技術・技法
- ③ 食に関する課題の解決策を考案し判断できる能力・表現力
- ④ 栄養と健康に関して生涯にわたり学ぶ姿勢
- ⑦ 社会的な能力や豊かな感性

【能力基準別到達目標（学修成果）】

(LO1) 知識・理解	専門科目群（社会生活と健康・人体の構造と機能・食品と衛生・栄養と健康・栄養の指導・給食の運営）により、専門知識を高い水準で網羅的に修得している。
(LO2) 技能	上の専門六分野やその他の関連分野に関して、専門知識だけでなく、専門技術・技法についても、幅広くかつ高いレベルで修得している。
(LO3) 思考力・判断力・表現力	様々な業務上の課題等に対して、改善方法等対策を考案・判断し、解決できる。
(LO4) 関心・意欲・態度	食の専門職に求められる高い専門性・問題解決能力を主体的に学ぶ姿勢を保持し、自律的な行動ができる。
(LO5) 人間性・社会性	多様な人々と協働して働くために必要な実務能力や社会性を有し、豊かな感性・人間性を備えている。

(2) 「5つの基準」別「教育内容・教育方法・評価方法」の具体的内容

(LO1) 知識・理解

【教育内容】

専門科目群（社会生活と健康・人体の構造と機能・食品と衛生・栄養と健康・栄養の指導・給食の運営）により、専門知識を高い水準で網羅的に修得することを図る。

【教育方法・学修方法】

講義形式が主体である。授業においてはアクティブ・ラーニングを極力採り入れ、知識・理解の定着とともに、思考力・判断力をも高める授業を行う。

【学修成果の評価方法】

筆記試験等の客観テストを中心に行う。

(LO2) 技能

【教育内容】

調理・給食管理のスキルやコンピュータを活用した献立作成や学外給食施設での給食管理校外実習など、現場に必要な技術や実践力を、実習科目等により幅広く修得することを図る。

【教育方法・学修方法】

演習や実習形式が中心。

【学修成果の評価方法】

レポート、実技試験、プレゼンテーションによる評価を中心に行う。

(LO3) 思考力・判断力・表現力

【教育内容】

専門科目群やその他の科目で、食の専門家の改善事例を学んだり、実習などで様々な改善の必要性を実感し改善を実践することで身につける。また、臨床栄養学実習、栄養指導論実習、応用栄養学実習などで栄養指導・栄養管理の実習をしながら、思考力・判断力・表現力を身につける。

【教育方法・学修方法】

演習や実習などグループ学習により、他者とのディスカッションやグループワークを通じて、思考・判断や表現力を修得していくことを図る。講義科目では、判断力を有するケース・スタディや改善事例などを扱う。

【学修成果の評価方法】

レポート、提出課題、成果発表を中心に評価を行う。その他講義科目では論述式試験問題により評価を行う。

(LO4) 関心・意欲・態度

【教育内容】

「卒業研究」及びその他の科目で高度な専門知識に実際に触れたり、修得法を体得することで、生涯にわたり学ぶ姿勢の育成を図る。

【教育方法・学修方法】

課題解決型に学習及び栄養士関係知識の実社会に向けた高度な内容や、知識の総合化を目指した学習など。

【学修成果の評価方法】

授業態度や成果発表を中心に評価を行う。また、栄養士の総合知識や先進的知識を客観テストで評価する。

(LO5) 人間性・社会性

【教育内容】

教養科目等により、社会で求められる表現力、調整力、実務等の社会的能力育成や、豊かな人間性の涵養を図る。また、校外実習を通して実社会において求められる社会性を身につける。

【教育方法・学修方法】

講義による理論の修得と実習による体験型学習を中心に行う。

【学修成果の評価方法】

理論については筆記テストが中心である。実習は、レポートや成果発表を中心に評価を実施する。

2. 「(期末)授業アンケート」結果の概要・分析と学科の課題・改善方策

(1) (問1)～(問6) 別・入学年度別

① ファクト・ファインディング

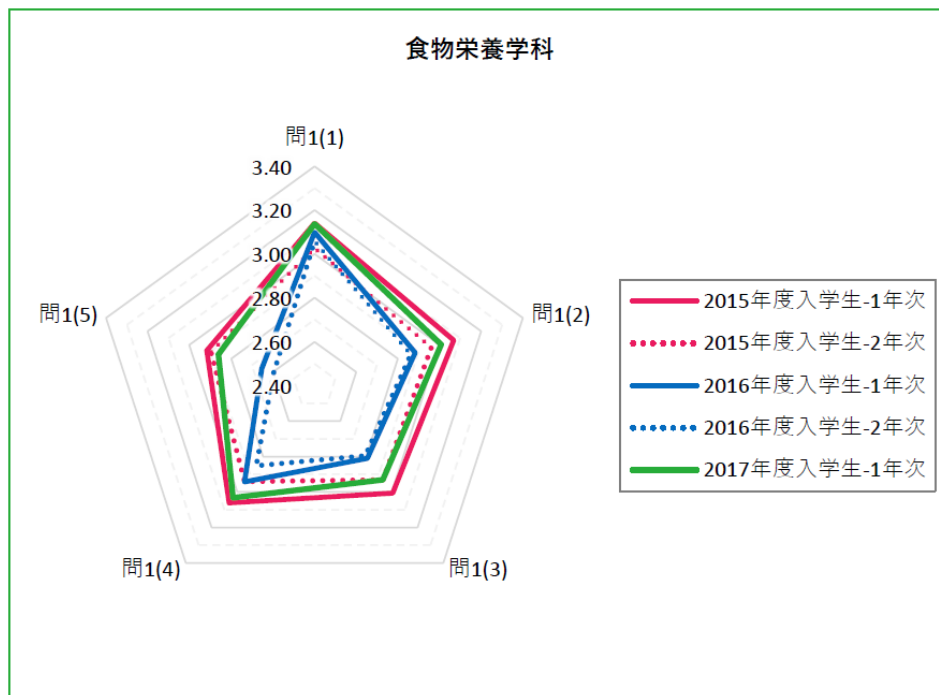
A) 2015・2016 年度入学生の(問1)回答

2016 年度入学生は、2015・2017 年度入学生より(問1)各回答のスコアが系統的に低い。

2015 年度入学生でみると、LO1、LO2 が高く、LO3～LO5 は若干低めであるが、栄養士養成のための専門知識・技能の蓄積がカリキュラム主体であるので、この入学年度の学生自己評価は妥当なバランスにあるといえる。

B) 2015・2016 年度入学生の(問2)回答

(問2) 2015 年度・2016 年度入学生とも授業形態・方法の各設問はだいたい学年進行とともに向上している。授業における工夫が学年進行とともに成果がみられる。ただし実験・実習より講義の比重の高い1年後期については、レポート等課題が少なくなっている。(問2)の(3)(4)も同傾向がみられる。



C) 2015・2016 年度入学の(問 4)回答

(問 4)授業の効果・成果については、設問(1)(2)専門知識・技能が高い。それに対し(3)～(7)のスコアが若干低くなっている。

D) 2015・2016 年度入学生の(問 5)回答

授業の総合評価に関する設問は、2015 年度入学生では 1 年前期以後スコアが下がり続けている。2016 年度入学生では、全般的に 2 年後期のみ他の学期よりわずかに低下しているが、全般的に 2015 年度入学生とややスコアは高めである。

E) 2015・2016 年度入学生の(問 6)回答

(問 6)設問の多くは、2 年後期に向かって向上しており、2 年後期に至るまでは学習のモチベーションの維持に成功しているといえる。ただし、1 年後期では、自宅学習時間の低下等がみられる。2 年後期で欠席回数の増加がみられる。

F) 2017 年度入学生の回答全般

2017 年度入学生の回答は 1 年次のデータしかないが、1 年前期に比べ 1 年後期で一見するとスコアが低下しているように見える設問が多い。

② 要因分析

A) 2015・2016 年度入学生の(問 1)回答

2016 年度入学生は、入学試験倍率が学科中一番高く、推薦専願で 1.82 倍、一般一期で 1.74 倍(2015 年度入学生は各々 1.11 倍、1.33 倍。2017 年度入学生も 2015 年度と同程度の倍率)であり、他の年度に比べ高い傾向があった。下の表に入試倍率を示す。富山東、富山南、富山、水橋、呉羽から 12 名入学するなど、富山市内普通科高校からの入学者が多かった年である(2015 年 5 名、2017 年 3 名、2018 年 1 名)。2016 年度入学生が他年度入学生に比べ特異的(レベルが高い可能性が大)であったのが要因である。即ち、(問 1)(1)～(5)全てで学修成果に関する自己評価が他の学年より厳しいと考えられる。達成への要求レベルが他の入学年次より高く、そのため自己評価が低くなるものと推察される。

2016 年度入学生は 2 年後期の(問 1)(5)のスコアが特に低い。フードスペシャリスト資格取得 25 名は前年 17 名より多く、栄養教諭二種免許取得は 10 名で前年どおりである。にもかかわらず設問 5 が低いのは、2016 年度入学生は、2016 年度近隣の金沢学院大学人間健康学部健康栄養学科の開設年

に入学しており、金沢学院大学の4年制管理栄養士養成学科新設の活発なテレビ宣伝にさらされており4年制との比較を意識する学生の割合が他年度と比べ多いと考えられ、社会的能力の獲得に自信を持ってない学生がやや多めにいたのではないかと推察される。

学科	種別		2016(平成28)年度入試				2015(平成27年)度入試			
			募集人員	出願者	受験者	合格者	募集人員	出願者	受験者	合格者
食物栄養学科	推薦	併設	52	10	10	10	50	8	8	8
		指定		22	22	22		15	15	15
		公募（専願）		40	40	22		40	40	36
		公募（併願）	若干名	5	5	1	3	0	-	-
		計	52	77	77	55	53	63	63	59
	自己推薦		若干名	7	7	3	若干名	8	8	5
	一般	I 期	23	47	47	27	22	48	48	36
		II 期	若干名	5	5	1	若干名	11	10	1
		A日程	若干名	1	1	1	若干名	4	4	3
		B日程	若干名	1	1	0	若干名	3	3	0
		センター前期	5	27	27	14	5	43	43	24
		センター中期	若干名	3	3	1	若干名	9	9	1
		センター後期	若干名	1	1	1	若干名	5	5	0
		学科計	80	169	169	103	80	194	193	129

2015年度入学生でみると、LO1～LO5は想定されるバランスどおりであり、2016年度入学生の問題と思われる。

B) 2015・2016年度入学生の(問2)回答

食物栄養学科のカリキュラムには専門科目の講義が多く、2年前期は逆に実験・実習科目が多い。実験・実習科目ではレポートが多く、グループワークや体験学習も多いことから、(問2)の(3)(4)(5)の回答はそれを反映していると思われる。時間割は1年後期で特に過密であり、そこからくる余裕の無さも要因として考える。考える対応策は、E)にまとめる。

C) 2015・2016年度入学の(問4)回答

(問4)で(1)(2)専門知識・技能が高いのは栄養士養成教育を行っている以上当然である。これに対し(3)～(7)のスコアがやや低めであることは、レポート等の提出・公表先が教員や、発表会であれば学生同士であり、給食管理校外実習以外は最終ユーザではなく、就職先現場で実際役立つか否か自信が持てないせいであろうと推測する。学校では実社会の給食室運営で必要なレベルと全く同じレベルでの「表現力(書く・説明する)、分析力、課題解決の能力」などの能力育成は無理であるが、全ての授業でこれらの練習を積めるような工夫を継続していき、それを積み重ねていくことで学生が柔軟に対処できるように育成すべきであろう。

D) 2015・2016年度入学生の(問5)回答

2015年度入学生の総合評価のスコアが最も低いが、103名が入学し定員80名の30%増しをわずかに下回った数である。厚生労働省から30%増しの場合、実験・実習を40人以内とするクラス編成の指示がでかねない状況であった。学生一人当たりにかかる教育密度が低下した結果であろう。2016年度入学生のスコアが全般として2015年度入学生より良いのも、このためである。

2015年度、2016年度入学生とも2年後期にスコアが下がっているが、カリキュラムによる。2年次夏休みの給食管理校外実習に合わせて、専門科目を2年前期までに多く学び、2専門科目自体がやや減る。その結果、内容が難しい科目の割合がやや他の学期より増えるため、難しい科目は学生の評価が一般には低く、わずかだがスコアが低下したものと思われる。

E) 2015・2016年度入学生(問6)回答

(問6)学修成果の自己評価の設問の多くは、2年後期に向かって向上しており、2年にわたるモチベーションの維持に成功しているといえる。これは、学生にとって2年夏休みの給食管理校外実習に

向けて学習の頂点を迎えるが、それ以後も2年12月初旬の全国一斉の「栄養士実力認定試験」に向けた対策用授業科目の開講と解説書・問題集の勉学の督励と、2月初旬の卒業研究発表により、2年後期まで学修意欲が維持されているからと考えられる。

欠席については、2年後期欠席が若干多くなるが、「栄養士」専門職の就職時期は後期が多く会社訪問・就職試験があることを考慮すると、2年間をとおして出席意欲は概して高いと判断する。

ただし、授業時間外学習時間であるが、1年後期の減少は、講義科目が多く実習科目ほどレポートが課せられないことなどの開講授業からくる要因と、過密カリキュラムのため（教員免許を取るためには、週2回は1限～5限授業を受けそれだけで疲れ果てるという）、自宅学習のゆとりがないことが要因と思われる。下に1年後期の時間割を示すが、学生にとっては疲れる時間割であるという。

2015年度入学生のみ2年後期でも、授業時間外学習時間が減少しているが、「栄養士実力認定試験」を学生が本試験を過大に評価してこれを中心に据えて勉学し、他の科目の授業時間外学習時間が減少したと推測されるが、この入学年度に特有のものであり2016年度入学生では出ていないので一過性のことと思われる。

平成27年度 後期時間割表(例)(1年)																										
● 授業時間は、次に示すとおりになります。																										
第1限 9:10~10:40 第2限 10:50~12:20 第3限 13:10~14:40 第4限 14:50~16:20 第5限 16:30~18:00																										
		月					火					水					木					金				
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
食 物 栄 養 学 科	1	学校栄養指導論	解剖生理学	献立作成 実習 高木 大森 堀田 A141 F106 F203 F306	ホーム ルーム	病 理 学	応用栄 養学Ⅰ 山岸 F203	栄養指 導論Ⅱ 高木 F204	教育課 程総論	トミ タン ア ワ ー	調理学 実習ⅢA 深井 F108	栄 養 学 総 論 富岡 F203	給 食 管 理 大森 F203	教 育 原 理	英語Ⅱ 望月 (キャンパス) F302F202	食品学 総論 竹内 F204	情報処 理演習 Ⅱ 堀田 F306				教 育 相 談	食品 衛生学 守田 F203	健康 スポー ツⅠ 立島 体育館	化学概 論Ⅱ (岡田) F302		
	2			調理学 実習Ⅲ			食品 衛生学 守田 F204	栄 養 学 総 論 富岡 F203			献立作成 実習B 高木 大森 堀田 A141 F106 F203 F306	応用栄 養学Ⅰ 山岸 F204	情報処 理演習 Ⅱ 堀田 F306		食品学 総論 竹内 F204	英語Ⅱ 望月 (キャンパス) F302F202	給 食 管 理 大森 F204					栄 養 指 導論Ⅱ 高木 F204	化学概 論Ⅱ (岡田) F302	健康 スポー ツⅠ 立島 体育館		
		山岸(飯野)	田淵	(原田)			村井嘉	守田	富岡	飯田	(体育館)	A141 F106	山岸	堀田	(吉田)	竹内	(キャンパス)	大森				樋口	高木	(岡田)	立島	
		F203	F203	F108		F203	F203	F204	F203	F203	(体育館)	F203 F306	F204	F306	F203	F204	F302F202	F204				F203	F204	F302	体育館	

F) 2017年度入学生の回答全般

2017年度入学生の回答は1年前期から1年後期へスコアが低下する設問が多い。詳細にみると、1年前期は2015年度、2016年度入学生よりもスコアが高く、1年後期は2015年度入学生と同等のスコアで2016年度入学生よりやや低い。1年平均では2015年度、2016年度入学生の中間とみなせるので悪くなったとはいえない。

③ 学科についてのインプリシケーション・課題と改善方策

A) 2015・2016年度入学生の(問1)回答

既に要因を検討したが、検討のとおり厳しく自己評価しているとすれば単年度にだけみられた事象で持続性がなく、今後自己評価の厳しい入学生が入ることは考えにくく、特別な対応は不要と思われる。実際2016年度入学生について、(問5)総合評価は、2015年度のそれよりより高くなっており教育成果があがっていたとみている。

なお2016年度入学生の(問5)回答の授業科目の総合評価では、内容的に難しいと思われる科目が他の年度より高い評価を得ているという現象がみられた。

B) 2015・2016年度入学生の(問2)回答

1年後期ではスコアの低下する設問が、他の学期に比べて多いことがアンケートから明瞭に見て取れる。(問2)(3)(4)(5)(6)のスコアの1年後期での低下を避ける対策を、専門科目、教養科目、教職科目の区別なく考慮すべきであろう。他の学期に比べ、実験・実習の割合が少ない分、課題提出やそのコメントを付けた返却など、自宅学習時間増加に繋がるような見直しが必要であろう。

また1年後期は時間割が過密であり、余裕を持った学習をめざして時間割を見直してみるべきであ

ろう。下の表のように、栄養士養成課程は専門科目の分類、科目内容（内容に応じた開講順序も含めて）、単位数が大部分規定されている。1年後期の一部専門科目を1年前期へ移し、2年前期の実験・実習科目（1科目につき2コマ分必要）を一部1年後期へ移すことは、時間割の制約よりほぼ困難である。ただし講義科目（1コマ）のみであればコマ数が少なく、1年後期の一部専門科目を半期ずらすことで時間割に若干余裕を持たせることは検討に値する。

別表 栄養士養成課程必修科目および単位数

栄養士法施行規則			栄養士養成課程		
教 育 内 容	規定単位数		科目名	単位数	
	講義 又は 演習	実験 又は 実習		講義 又は 演習	実験 又は 実習
社会生活と健康	4		食生活論	1	
			公衆衛生学Ⅰ	2	
			公衆衛生学Ⅱ	2	
			社会福祉概論	1	
			社会生活と健康の合計単位数	6	
人体の構造と機能	8	4	解剖生理学	2	
			解剖生理学実験		1
			運動生理学	1	
			生化学Ⅰ	2	
			生化学Ⅱ	1	
			生化学実験		1
			病理学	2	
			人体の構造と機能の合計単位数	8	2
食 品 と 衛 生	6		食品学総論	2	
			食品学実験		1
			食品学各論	2	
			食品加工学	2	
			食品衛生学	2	
			食品衛生学実験		1
			食品と衛生の合計単位数	8	2
栄 養 と 健 康	8		栄養学総論	2	
			応用栄養学Ⅰ	2	
			応用栄養学Ⅱ	1	
			応用栄養学実習		1
			臨床栄養学Ⅰ	2	
			臨床栄養学Ⅱ	1	
			臨床栄養学実習		1
			栄養と健康の合計単位数	8	2
栄 養 の 指 導	6	10	栄養指導論Ⅰ	2	
			栄養指導論Ⅱ	2	
			栄養指導論実習		1
			公衆栄養学	2	
			栄養の指導の合計単位数	6	1
給 食 の 運 営	4		調理学	2	
			調理学実習Ⅰ		1
			調理学実習Ⅱ		1
			調理学実習Ⅲ		1
			調理学実験		1
			給食管理	2	
			給食管理実習		1
			給食管理校外実習		2
			献立作成実習		1
			給食の運営の合計単位数	4	8
小 計	36	14	小 計	40	15
合 計	50		合 計	55	

C) 2015・2016年度入学の(問4)回答

(問4)で(1)(2)に比べ(3)～(7)のスコアがやや低めであるが、学校では実社会の現場と全く同じように、(3)～(7)の能力、即ち、表現力（書く・説明する）、分析力、課題解決能力といった能力育成は無理であるので、多くの授業でこれらの練習を積めるような工夫を継続していき、その積み重ねでの学生の柔軟性を育成するようにすべきであろう。

なお、設問(7)の「社会性・人間性を高めるのに役に立つ」ためには広い視野にたつ必要があると考えられ、栄養士としての将来性や人間性に資するようなカリキュラムについて検討するだけでも行う

べきと思われる。

D) 2015・2016 年度入学生の(問 5)回答

2015 年度入学生のスコアが厳しいのは水増し入学のせいであること、(問 5)総合評価は 2016 年度入学生では、評価が高くなっていること、2 年間を通してほぼ一定の評価を維持していることから教育成果があがっていたとみており、とくに対応はいらないと考える。

2015、2016 年度の 2 年後期のスコア低下がわずかだが見られる点は、内容が難しい科目の担当教員が交代の時期にあたっているので、対応策を考えることより交代の結果に注目していきたいと考える。

E) 2015・2016 年度入学生の(問 6)回答

(問 6)の設問の多くが 2 年後期に向かって向上しており、2 年にわたるモチベーションの維持に成功しているといえる。これは、学生にとって 2 年夏休みの給食管理校外実習に向けて学習の頂点を迎えるが、それ以後も 12 月初旬の全国一斉の「栄養士実力認定試験」に向けた勉学の督励と、2 月初旬の卒業研究発表により、学修意欲が維持されていると考えられる。

2015・2016 年度入学生の 2 年後期欠席の増加に関しては、「栄養士」専門職求人時期は 2 年後期が主であるのは長期の慣習であり、教職員サイドでは対応ができない。

1 年後期での授業時間外学習時間低下については、B)で記したように、専門科目、教養科目、教職科目の区別なく考慮すべきであろう。他の学期に比べ、実験・実習の割合が少ない分、課題提出やそのコメントを付けた返却など、自宅学習時間増加に繋がるような見直しが必要であろう。また、1 年後期時間割は、2009 年 7 月 3 日文部科学省教職課程実地視察で 2 年次教育実習までに教職実践演習以外は終えているべきであるとの指摘に従った結果、元々過密であった 1 年後期時間割が更に過密になり学生に余裕がなくなったせいとも考えられる。B)で記したように、わずかでも時間割の緩和ができないか検討する価値はある。

2015 年度入学生の 2 年後期の授業外学習時間の低下は、『「栄養士実力認定試験」で C 評価の場合、栄養士として実力不足であること、又そのため A 又は B 評価になるまで再試験を繰り返し課す』とのアナウンスが学生を煽ることになり、授業外学習時間が栄養士実力認定試験に関する学習に集中した結果である。ただし一過性の現象と思われ 2016 年度入学生では改善されており、特に対応策はいらないと考える。

F) 2017 年度入学生の回答全般

1 年平均では、2015 年度、2016 年度入学生の間とみなせるので悪くなったとはいえない。今すぐ対策が必要なわけではなく、2 年次での回答を注目していく必要がある。

(2) 総括

- ① 入学年度ごとにデータが異なる部分の一部は、その年次の入学生に特有なものと解釈される。一方入学年次にかかわらず現れたデータ、1 年後期は一部の設問ではスコアが低下していることなどについては、注意を払って対応することが必要と思われる。
- ② 1 年後期は、専門科目、教養科目、教職科目も全て含め、課題提出・返却、自宅学習時間改善にこれからも取り組み、1 年後期でのこれらに関連するスコアの低下をなるべく回避することが必要と思われる。これとは別に、学年を問わず表現力、分析力等向上の機会を増やす授業の工夫も継続して行っていく必要があるであろう。
- ③ 2019 年度からフードスペシャリスト科目の廃止が始まるが、過密な時間割の改善に役立たないか検討する。また、栄養士としての将来性や人間性に資するようなカリキュラム改善に繋げることができないかも検討する必要があると考える。

【2】幼児教育学科

1. 学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

(1) 「5つの基準」別「学修成果」の具体的内容

【幼児教育学科が育成する人材像】

幼児教育学科では、本学科がめざす人材像への到達に向けて、以下の学修成果を挙げ、本学の卒業要件を満たした者に、短期大学士（保育学）の学位を授与します。

【めざす人材像】

- ① 保育・幼児教育及び子育て支援についての専門的な知識と技能を有する人。
- ② 子どもや子どもが育つ環境に高い関心をもち、論理的に考察するとともに適切に判断し実践する力を有する人。
- ③ 信頼関係を基本とする人間関係を構築し、子どもの福祉を守る社会的使命を果たそうとする人。
- ④ 子どもに対する深い愛情と豊かな感受性・共感性を備え持つ人。
- ⑤ 自らを省察し、他者と協働して保育者としての資質の向上を志向する人。

【「5つの基準」別「学修成果」】

(LO1) 知識・理解	保育の本質と目的を理解し、子どもや家庭、保育の内容や方法についての専門的知識を身につけている。
(LO2) 技能	子どもの発達支援に必要な、保育展開のための技術、教材活用のための技術、環境構成のための技術、および家庭支援に必要な技術を身につけている。
(LO3) 思考力・判断力・表現力	学修した知識・技術を総合して、保育・子育て支援の実践的な展開や課題の解決を図ることができる。
(LO4) 関心・意欲・態度	保育者としての責任感・使命感に基づき、自らを省察し、主体的に学びを深めることができる。
(LO5) 人間性・社会性	①社会の一員としての自覚を持ち、他者を尊重し、協力・協働を図ることができる。 ②深い愛情と豊かな感受性・共感性をもって子どもに対応することができる。

(2) 「5つの基準」別「教育内容・方法・評価方法」の具体的内容

(LO1) 知識・理解

【教育内容】

主として「保育の本質・目的」「保育の対象理解」「保育の内容・方法」「教養」科目群により、保育者として必要な教養・専門的知識・理解の獲得を図る。

【教育方法・学修方法】

主として講義形式の授業により知識・理解の定着を図るが、可能な限りアクティブ・ラーニングを採り入れる。

【学修成果の評価方法】

筆記試験、小テスト、レポート。

(LO2) 技能

【教育内容】

主として「基礎演習」「保育の表現技術」「保育の内容・方法」科目群により、保育者として必要な専門的技能・表現技能の獲得を図る。

【教育方法・学修方法】

実技演習、成果発表の練習、制作により専門的技能・表現技能の獲得を図る。

【学修成果の評価方法】

実技試験、作品、プレゼンテーション、レポート。

(LO3) 思考力・判断力・表現力

【教育内容】

- ① 主として「保育の実習」「保育の内容・方法」「総合演習」を通して保育内容の実践的理解と専門的知識・技能の活用を図る。
- ② 専門科目全体を通して保育者として必要な思考力・判断力・表現力を養成する。

【教育方法・学修方法】

グループワーク、ディスカッション、実習、実習指導を通して思考力・判断力・表現力を養成する。

【学修成果の評価方法】

レポート、試験、作品、プレゼンテーション、実習日誌、実習先の評価。

(LO4) 関心・意欲・態度

【教育内容】

- ① 教育課程全体を通して、子どもや子育てに関する関心を高め、主体的に学び続ける力を養う。
- ② 教育課程全体を通して、保育者の責任感と使命感を育む。

【教育方法・学修方法】

課題レポート作成、実習、実習指導を通して主体的に学び続ける力を養う。

【学修成果の評価方法】

課題レポート、試験、受講態度、実習日誌、実習先の評価。

(LO5) 人間性・社会性

【教育内容】

体験を重視した教育課程や学外における活動によって、他者との適切なコミュニケーション技術と協働性、子どもへの深い愛情と豊かな感性・共感性を養成する。

【教育方法・学修方法】

グループワーク、協働作業による制作、プレゼンテーションに向けての練習、学外における活動を通して、コミュニケーション技術、協働性、深い愛情、豊かな感受性・共感性を育む。

【学修成果の評価方法】

作品、プレゼンテーション。

2. 「(期末) 授業アンケート」結果の概要・分析と学科の課題・改善方策

(1) 「学修成果」の全体的な概要と分析

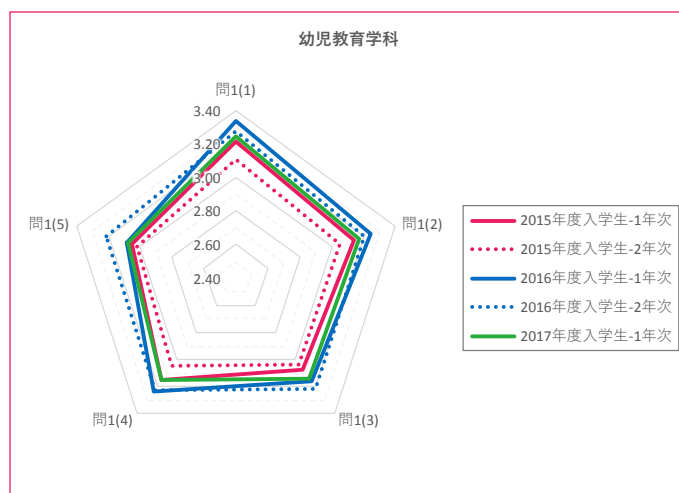
① 問1「授業科目における学習成果の到達度に関する自己評価」について

2015年度入学生では、全般的にバランスのとれた自己評価が見られた。しかし、2年前期まではほぼ横ばいであったが、2年後期に大幅に低下している。特に、LO1(1)・LO2(2)・LO4(4)で低下している。

その理由としては、2年の後期早々には学生の就職も決まって緊張感が緩んだ態度が、そのまま自己評価にも表れたものと思われる。

2016年度入学生では、2015年度入学生よりも全般的に評価レベルが上昇している。全般的に、ほぼ横ばいで推移しているが、2年次のLO5(5)の自己評価上昇が顕著である。また、自己評価レベルは4学科中最も高い。理解や技能が身につくことで、人間として必要な社会性・人間性も身についたと自信を深めた学生が増えたということである。

2017年度入学生では、バランスのとれた自己評価の傾向は続いている。2016年度入学生よりもやや低下しているが、2015年度入学生よりも上昇傾向がみられる。



3年間を通して、問1については、幼児教育学科の学生の自己評価は概して高い。

学年によって、2年後期に下がる場合と上がる場合が見られたが、これは学年集団の学習意欲が就職確定後も持続するかどうかで左右されているといえる。就職確定後の指導に工夫が必要ということであろう。

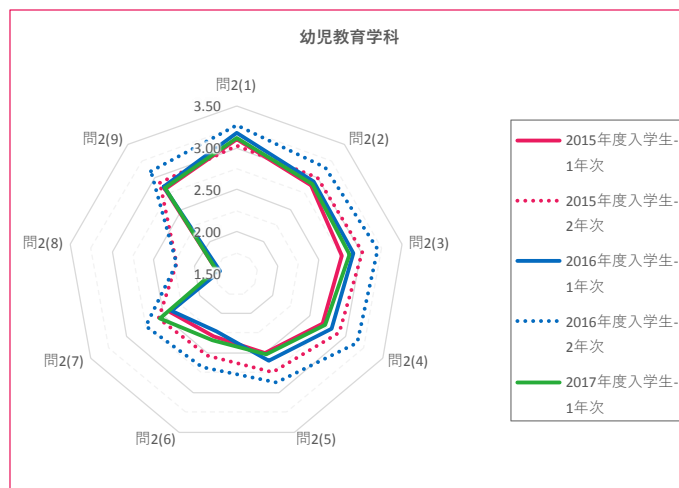
②問2「授業科目の授業形態・方法に関する評価」について

2015年度入学生では、全般的に一貫して評価の上昇推移がみられる。特に(5)・(6)・(7)・(8)の上昇が顕著である。また、(8)を除いて、バランスの取れた評価レベルとなっている。これは個別指導や補習が行われなかったということであり、必要がなかった可能性もある。

2016年度入学生でも、2015年度入学生と同様の傾向がみられた。2015年度入学生に比べ、評価レベルは上昇している。特に、2年次の評価レベルが高い。

2017年度入学生では、(7)を除き、1年後期に上昇している。2016年度入学生に比べてほぼ横ばいの傾向がみられるが、2015年度入学生よりも上昇傾向がみられる。

2016年度入学生は、問1・問2のどちらでも評価が高い傾向がみられる。これは、授業形態の工夫が学修成果に結びついていることを示すものであろう。ただし、これは担当者が変わったからなのか、学生の受講意識の違いによるものか、これだけでは何とも言えない。



③問3「授業科目の目的・成績評価の方法等の理解に関する自己評価」について

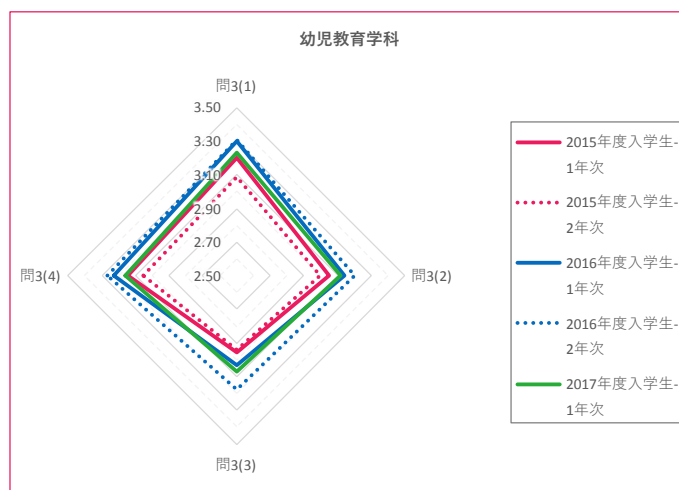
2015年度入学生では、2年前期までは横ばいだったが、2年後期に低下している。(1)～(4)のなかでは、(3)の成績評価の方法やルーブリック（評価基準）についての理解度の低さが目立つ。

2016年度入学生では、2015年度入学生よりも評価レベルが上昇している。また、2年次に評価レベルが上昇しており、特に(3)の上昇が顕著である。

2017年度入学生では、2016年度入学生に比べてほぼ横ばいであるが、2015年度入学生よりも上昇傾向がみられる。

2016年度入学生は、問1・問2・問3いずれでも評価が高くなっている。

授業の目的や評価の方法が理解できていれば、授業に取り組む際の態度も違ってくるであろう。授業の目的や評価の方法について理解を深めさせることが学修意欲の向上につながっていることが推測できる。



④問4「授業に関する効果・成果に関する評価」について

2015年度入学生では、概して低下傾向がみられ、特に(1)・(2)の低下が目立つ。授業の内容についての興味関心や知識技能の獲得について、2年の後期に低下するのは、問題である。

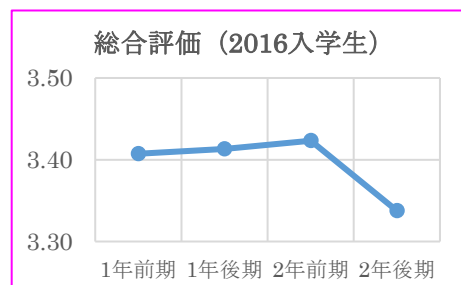
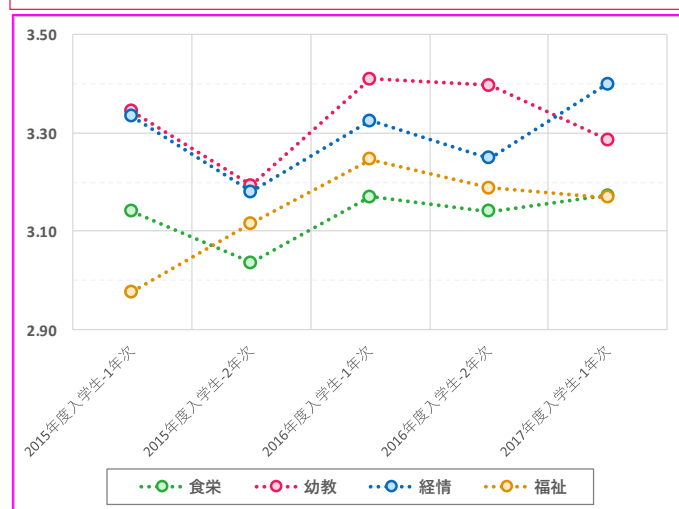
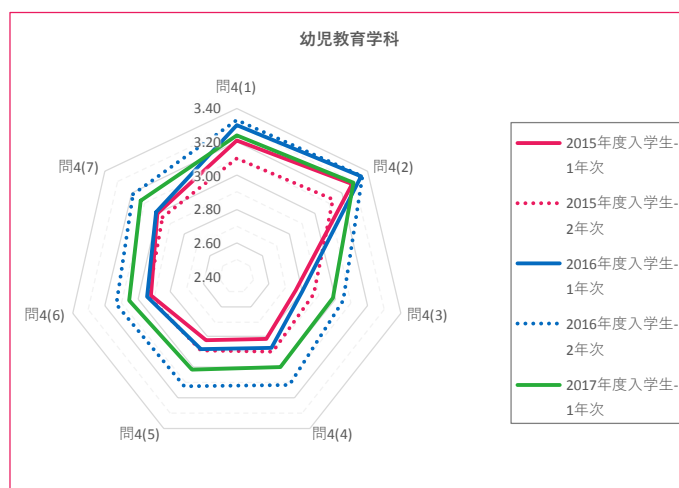
2016年度入学生では、2015年度入学生よりも評価レベルが上昇している。1年次と2年次の比較では、(1)・(2)が高止まりで、それ以外は上昇に推移しており、好ましい結果となっている。

2017 年度入学生では、2016 年度入学生よりも評価が高くなっている。アクティブ・ラーニングを取り入れた授業が増えたことを反映しているのであろう。

⑤問 5「授業に対する総合評価」について

2015 年度入学生では、2 年後期の低下が顕著である。2016 年度入学生では、2015 年度入学生よりも高い評価となっている。どちらの場合も、他学科と比較すると、最も高い評価レベルになっている。2017 年度入学生では、低下している。

2016 年度入学生の評価推移をみると、2 年後期には大きく下がっている。科目別に調べた結果、いくつかの科目で極端に低いものがあつた。評価の低い科目は、社会的養護内容(2.74)、音楽Ⅱ-2(2.95)、国際情勢(3.00)、生活と科学(3.13)となっている。社会的養護内容については、2015 年度入学生でも極端に低くなっていた。担当は、外部講師の方で、どのような授業をしておられるのか、把握することはできなかった。他の専門的科目においては、評価が下がっている状況はみられなかった。学生側の問題というよりも、担当者の指導法に問題がありそうである。



⑥問 6「授業における学修行動・意欲に関する自己評価」について

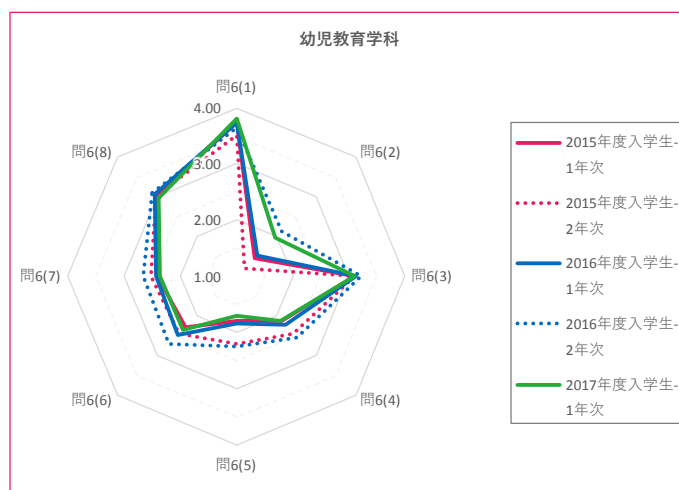
2015 年度入学生では、全般的に学修行動の改善がみられるが、(2)の授業外学修時間が、4 学科中最低となっている。

2016 年度入学生でも、全般的に学修行動の改善がみられるが、2015 年度入学生と比べて特段の改善はみられない。

2017 年度入学生では、2016 年度入学生に比べて全般的に改善がみられる。特に 1 年後期の(2)が大幅に改善している。

⑦まとめ

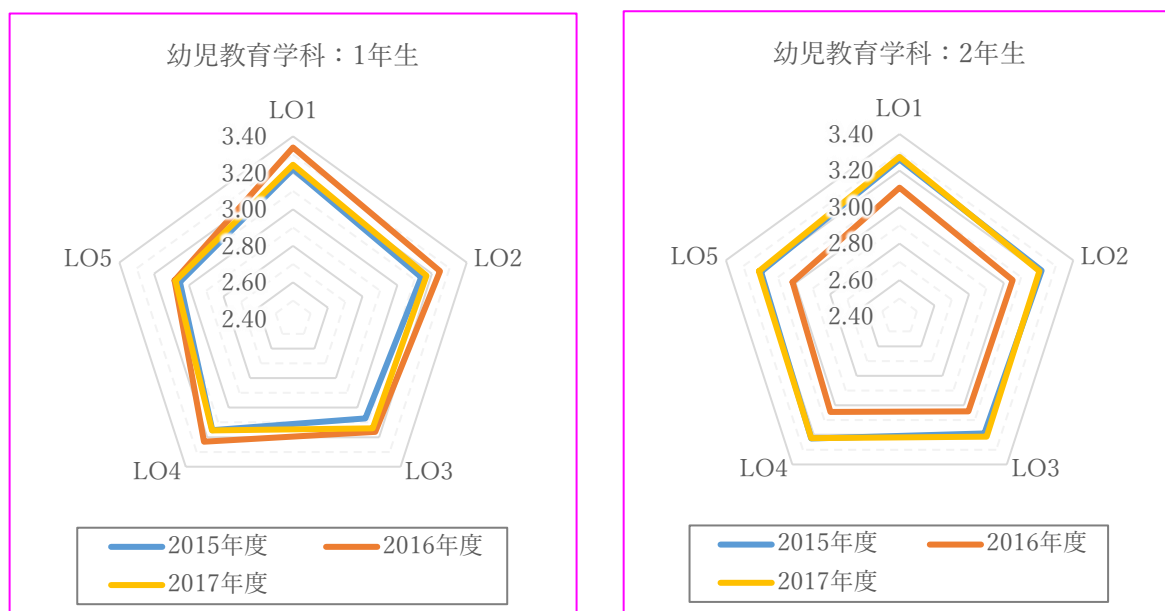
2015 年度入学生の評価は、全体的に低下傾向がみられる。この学年は、定員 80 名に対して 110 名入学している。そのうち、3 名が退学、1 名が留年するなど学生の異動も多かった学年である。学生数も多いこともあり、落ち着いた学修環境をつくれなかったものと思われる。



それに対して、2016 年度入学生は、全体的に高い評価を維持しており、教員の指導効果があらわれたものと思われる。総合評価でも、他学科と比較して高い傾向にあり、学生の満足度は高いと判断できる。

2017 年度入学生は、2106 年度入学生よりも全体的に評価が下がっているが、2015 年度入学生よりも全体的に高くなっている。

年度によって波はあるが、基本的には以前よりも上昇傾向にあると言えよう。教員側の授業改善の努力が少しずつ成果を挙げてきたと言えるのではないだろうか。



また、1 年次から 2 年次の推移をみると、LO5 の「社会性・人間性」の評価が高くなっていることが明らかにみてとれる。どの入学年次の学生をみても、LO1～LO5 のバランスがよく、正五角形に近い形となっている。このことは、保育者としての必要な力がバランスよく獲得されたということであろう。このバランスの良さは、他学科と比較しても突出しており、幼児教育学科の特色を反映していると考えられる。

課題として考えなければならないのは、授業外学習時間の確保である。学生の中にはアルバイトをしなければならない経済状況の者もいるかもしれないが、学生の本分は勉強である。授業外にも学修しなければならないことを分からせるとともに、学修しなければならない状況をつくっていくことも考えていかなければならない。

(2) 科目の区分別分析と課題・改善方策

①区分別分析

幼児教育学科の教育課程は、教養科目と専門科目に区分され、専門科目はさらに「保育の本質・目的」「保育の対象理解」「保育の内容・方法」「保育の表現技術」「保育の実習」「総合演習」に区分されている。区分ごとに目的が大きく違うので、学生の受け止め方も区分ごとに傾向がみられるのではないかと予想し、区分ごとに傾向を調べてみることにした。全科目を分析することは困難なため、1～2 科目ずつ抽出して調べることにした。

まず、「教養科目」については、「英語」と「基礎演習」を調べた。

英語Ⅰ（1 年後期）はクラス別、Ⅱ（2 年前期）は 1 クラスを 2 グループに分け、専任教員とネイティブ・スピーカー教員の 2 名で授業を担当している。Ⅰでは保育英語のテキストを使用し、英問英答、リスニング、リーディング、会話練習、英語の歌等の活動を行っている。Ⅱでは、ネイティブ教員による英語のおとぎ話（fairy tales）をテーマとする授業が行われ（全 7 回）、これには、グループワークによる英語の絵本制作活動が含まれる。概してⅠよりⅡの方が学生の評価が高い。その原因として、Ⅱでは ① 1 グループ 20 名程度の少人数による行き届いた指導が行われる、② 15 回中 7 回の授

業がすべて英語で行われる、③絵本作活動が採り入れられていることが挙げられる。他学科の学生評価と比較しても、本学科の学生はネイティブ教員が英語で行う授業やアクティブ・ラーニングの活動との親和性が高いと考えられる。

「基礎演習」は、幼児教育学を学び研究する際に必要となる基礎力を身につけさせる目的で、2015年度から開始した科目である。したがって、まだ模索中の科目と言ってもよい科目であるが、幼児教育学学科の平均と比較した場合、問1の(1)から(5)の全てにおいて、平均を下回っており、学生の評価は低いと判断できる。教養科目についての評価は概して低い。

「保育の本質・目的」については、「児童家庭福祉」を取り上げる。1年生前期の授業科目であり、講義内容が子ども・家庭の多岐にわたる内容であるため、学生には範囲が広く、非常に難しく感じられていると思われる。そのことが特に問1(3)に顕著に表れている。問4が平均的に低いことは、学生の興味関心との齟齬があるのか、日頃のメディアなどの情報を取り入れるなど工夫して、児童家庭福祉の現状がイメージしやすいように今後進めていくことが必要である。本質にかかわる知識や技術が実際にどのような場面で必要になるのか、学生が具体的にイメージできる工夫が必要である。

「保育の対象理解」については、「保育の心理学」と「子どもの保健」を取り上げる。「保育の心理学」については、「学生の興味・関心」の(1)と、「将来の職業に関する知識や技能」の(2)が高くなっている。「子どもの保健」については、問1(1)知識の理解(2)技能習得と、問4(1)興味・関心の喚起が高まり(2)将来に役立つと評価している。子どもに直接関わる学習内容であるため、学生の評価も高くなる傾向がみられる。

「保育の内容・方法」については、「保育内容(健康Ⅰ)」を取り上げる。2015年度と2016年度では、問1(5)の項目が横這いであった。そのほかの項目はやや上昇しており、特に(1)の項目は大幅な上昇であった。これは就職試験前に発達の仕方と月齢を語呂合わせで記憶を促したことが理由ではないと思われる。目に見える成果が感じられる場合に評価が高くなるといえる。授業内容においては、2016年度は伝承遊びを導入したために保育者となるための技能や技術の項目であるところが多少ではあるが上昇した。学生の興味を引く内容を取り上げると評価が上がる事例だろう。

「保育の表現技術」については、「図画工作Ⅰ・Ⅱ」と「音楽表現Ⅰ・Ⅱ」を取り上げる。

「図画工作Ⅰ・Ⅱ」では、保育職として実際に役立つ知識や造形表現技能が身に付いたとの評価が高く、制作活動を通じた実技中心の学習成果が表れている。しかし、全ての年度において、2年後期には全項目で評価値が下がる。理由としては学習方法と形態の変化が考えられる。図画工作Ⅰでは基礎技術や技法の習得を個別制作中心に取り組む。Ⅱの授業では身に付けた知識や技術を基にして、造形表現活動を自ら考えるグループ形態での制作が中心になる。発展的な学習形態に対する学生自身の満足度や成就感が低いことが評価値に反映されているとすれば、グループ活動における授業形態の見直しが必要であろう。

「音楽Ⅰ・Ⅱ」では、習熟度別にグループ分けをして少人数制で授業を実施しており、初心者と経験者による取り組み具合の差が明らかである。総合評価は経験者の方が高い。学修行動(学習意欲に関する自己評価)においても経験者の方が高い。つまり、苦手な初心者ほど出席率や授業外学習、努力の数値が低くなり、自己評価が下がっている。初心者に限って、圧倒的に練習量が足りていないのに、「私たちは初心者なのだから、もっとていねいに教えてほしい」という意見は多いが、教員としては、苦手なら人一倍努力してほしいと願っている。

②課題と改善方策

教養科目や本質の関わる科目については、概して評価が低い傾向にある。同じ講義形式でも、「保育の心理学」や「子どもの保健」については、将来の職業に関連する知識を獲得する上で役立っていると評価する割合が増えている。子どもに関わることが見えやすい科目については、評価が高くなる傾向にあり、専門への関わりが見えにくい科目は評価が低くなる傾向にある。学修の必要性を理解させるための工夫が必要である。その際、英語でのアクティブ・ラーニングの取り組みが参考になるであろう。他学科学生との取り組み方の違いが、明らかになったことの意義は大きい。幼児教育学学科の学生の学び方の特徴を把握した上で、対応を考えることも有効である。

一方、図画工作でみられたように、個別的な学修の時には、成果がみえやすいので評価が高くなるが、集団での学修になると評価が低くなる傾向がある。自分の成長や貢献が見えにくいためであろう。保育士はチームワークを要する仕事である。学生には、集団での学びを高めていく姿勢を身につ

けてほしいものである。

また、音楽でみられたように、学生には、得意であり好きなことには積極的に学修するが、不得意なことにはなかなか取り組めない状況がみられる。自分よりも上手な学生を見ると、自分の出来なさを意識させられ、意欲がかえって低下する学生も見かけられる。上手な学生に学び、お互いに高め合っていく姿勢を身につけてほしいものである。

2－(2)－⑦でみたように、幼児教育学科の学生には、「社会性・人間性」が高まったと評価する学生が多い。この「社会性・人間性」での成長が、学びに結びついていくことが、今後の一番の課題であろう。

(3) 総括

幼児教育学科の教育課程は、来年度から大幅に変更となる。文部科学省の再課程認定に対応するためと同時に、厚生労働省から保育士養成課程の見直しが求められているためである。どちらも、より実践力のある幼稚園教諭・保育士の養成が求められている。そのためにはまず、この見直しの趣旨を教員間で共通理解することが必要である。

一方で、授業アンケートの結果から、改善の方向性も見えてきた。実践への結びつきがみえにくい教養的な科目や本質に関わる科目では概して学修意欲が低いが、英語Ⅱで見られたように、本学科の学生にはアクティブ・ラーニング的な手法が有効であるようである。

また、図画工作の評価で明らかになったように、グループ活動での学修成果を高める工夫が今後必要であろう。

また、学ぶ意欲を高め、授業時間外での学修時間が増えて、結果として実践力の向上につながる工夫を考えていくことが必要である。

【3】経営情報学科

1. 学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

(1)「5つの基準」別「学修成果」の具体的内容

【経営情報学科が育成する人材像】

経営情報学科では、十分な学修成果を挙げて、本学科が育成する人材に必要な以下の力を身につけ、本学の卒業要件を満たした者に短期大学士(経営情報学)の学位を授与します。

【「育成する人材」に必要な力】

- ① 健康で豊かな人間性と真摯な人間関係力・協働力
- ② 社会常識・マナーをわきまえた、責任ある行動力
- ③ 自ら主体的に学び、考え、実践する能力と、学び続ける姿勢
- ④ 経済・経営、簿記・会計、情報、ビジネス実務等の実践的知識・技能と実践力

【「5つの基準」別「学修成果」】

(L01)知識・理解	社会人としての常識・マナーをわきまえ、ビジネスの現場等実社会で生きていく上で必要となる、専門分野での実践的な知識を身につけている。
(L02)技能	ビジネスの現場で必要とされる専門技能・資格や、自らの思考・判断のプロセスを明確に伝えるための技能・表現技法等を身に付けている。
(L03)思考力・判断力・表現力	専門分野における実践的な知識・技能や研究方法を用いて、社会や組織の諸課題を自ら発見し、論理的に分析・考察し、課題解決のためのアイデアを構想し表現することができる。
(L04)関心・意欲・態度	社会・組織における諸課題の解決に向けて、自らの感情や行動を律しながら主体的に学び続けることを通じて、社会人・職業人としての資質・能力の向上に努めることができる。
(L05)人間性・社会性	社会・組織の一員として、独善に陥らず、多様な価値を尊重し、人の気持ちを思いやり、仲間と協力・協働して目標の実現に貢献し、社会人・職業人としての責任を果たすことができる。

(2)「5つの基準」別「教育内容・方法・評価方法」の具体的内容

(L01)知識・理解

【教育内容】

教育課程全体を通じて、職業人としてビジネスの現場で必要となる「経済・経営」、「簿記・会計」、「ICT」、「ビジネス実務」分野における実践的な専門基礎知識・理解の獲得を図る。

【教育方法・学修方法】

講義形式が主体である授業においても、反転授業やクリッカー利用型のアクティブ・ラーニングを積極的に採り入れ、知識・理解の定着と共に、思考力・判断力も高める授業を行う。

【学修成果の評価方法】

筆記試験等の客観テストで評価する。

(L02)技能

【教育内容】

教育課程全体を通じて、情報リテラシーとコミュニケーション・スキルの育成を目指す。

特に、教養・専門演習では、レポート作成スキルやプレゼンテーション・スキル等の表現技法を育成する。

また、ビジネスの現場で必要となる日商簿記検定資格・日商PC検定資格や図書館司書等の資格取得を目指す。

【教育方法・学修方法】

主に演習形式の授業で実施し、反転授業等のアクティブ・ラーニングやピア・アセスメント等による「振り返りによる気づき」の喚起を促す。

【学修成果の評価方法】

筆記試験等の客観テスト及びレポートやプレゼンテーションはルーブリックで評価する。また、学生同士のピア・アセスメントも加味する。

(L03)思考力・判断力・表現力

【教育内容】

教育課程全体を通して、獲得した知識・技能を応用して分析・思考・判断する力を育む。特に、卒論の作成に当たっては、クリティカル・シンキング力を育成する。

【教育方法・学修方法】

ディスカッション、グループワーク、ピア・インストラクション、ピア・アセスメント等を通じて、他者の考えを鏡とし、自らの思考・判断を振り返る。

【学修成果の評価方法】

記述式・小論文テスト、プレゼンテーション・論文のルーブリックで評価する。また、学生同士のピア・アセスメントも加味する。

(L04)関心・意欲・態度

【教育内容】

教育課程全体を通して、社会での出来事と自らの立場・役割・人生との関連性を考えると共に、主体的な学習態度を養う。特に、教養・専門演習では、自らのテーマについて計画的かつ粘り強く調査・分析する力を養う。

【教育方法・学修方法】

課題解決型学習の導入を図るとともに、共に教え合い学び合う環境作りと、毎回の授業アンケート結果のフィードバックにより、主体的学びへのモチベーションを高める。また、良い質問の仕方を指導する。

【学修成果の評価方法】

授業外学習時間、予習・復習の実績、受講態度等を評価する。また、学生同士のピア・アセスメントも加味し、その他、インターンシップの受入先評価も加味する。

(L05)人間性・社会性

【教育内容】

「三位一体のキャリア教育」、各種授業でのグループワーク、教養・専門演習を通じて、コミュニケーション能力や協調性・協働力を育む。

【教育方法・学修方法】

グループワーク、ディスカッション、インターンシップ等の経験を積み重ねることでコミュニケーション能力や協調性・協働力を高める。

【学修成果の評価方法】

ルーブリックで評価する。また、学生同士のピア・アセスメントも加味する。その他、インターンシップでは受入先の評価も加味する。

2. 「(期末) 授業アンケート」結果の概要・分析と学科の課題・改善方策

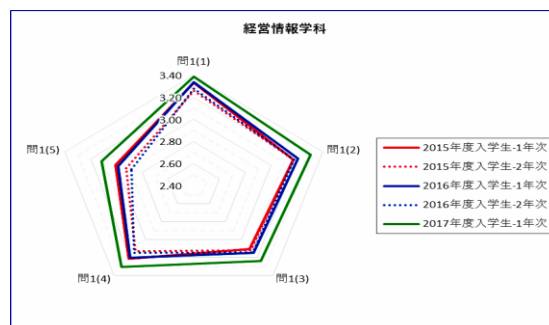
(1) 「学修成果」の全体的な概要と分析

① 問1 「授業科目における学修成果の到達度に関する自己評価」について

【2015 年度入学生】(図 1.1)

(図 1.4)

- ・ 全体的にほぼ横ばいで、2年前期に低下し、後期に戻す。これは、2年前期の就職活動等で自己評価が低くなり、後期は就職が決まり自己評価が高くなるためと思われる。
- ・ LO1 から LO5 はバラツキが大きく、LO1 が高く、特に LO5 が低く、次に LO3 が低い。LO1 が高いのは情報等の授業で、技能・技術が上がるのが実感できたと考えられ、LO5 が低いのは、社会で活動する機会が少ないためと思われる。



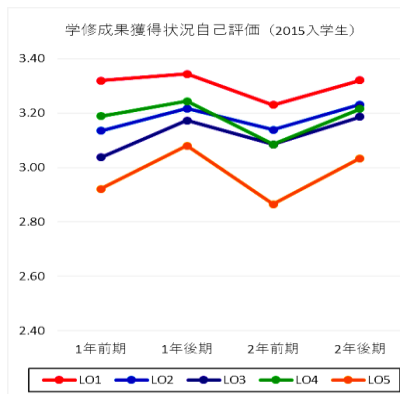
【2016 年度入学生】(図 1.2)

- ・ 評価レベル傾向は、2015 年度入学生と同様で自己評価レベルは全般的に高い。推移傾向は 2015 年度生より少し右肩下がりであるがほぼ同様である。

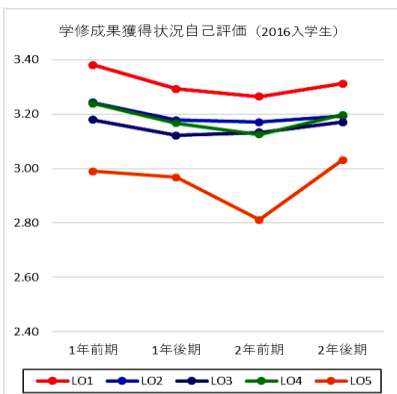
【2017 年度入学生】(図 1.3)

- ・ 2016 年度入学生に比べ、大幅改善している。比較的バランスのとれた自己評価であり、1 年次の自己評価レベルは 4 学科中最も高い。
- 3 年間を通して、問 1 については、経営情報学科の学生の自己評価は概して高いが、毎年 LO5 の値が低く、理解や技能が深まることで社会性と人間性が身に付く工夫が必要と思われる (図 1.4)。

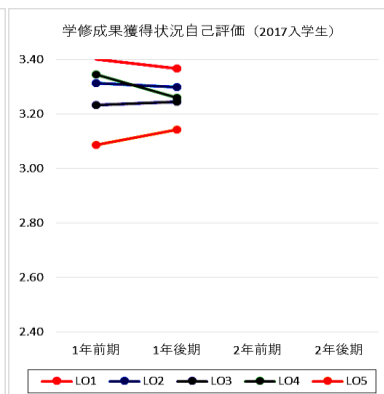
(図 1.1)



(図 1.2)



(図 1.3)



②問 2 「授業科目の授業形態・方法に関する評価」について

【2015 年度入学生】(図 2.1)

- ・ 問 2 は、全体としての推移はほぼ横ばい傾向にあるが、(3)、(4)、(6)、(8)は 2 年次に上昇しており、これは専門演習の研究等で学生の活動や、個別指導が行なわれたためと考えられる。しかし評価レベルのバラツキ大きく、(3)、(6)、(7)、(8)の評価レベル低く、特に (8) が低く、学生がより個別指導や補習を求めていることが分かった。

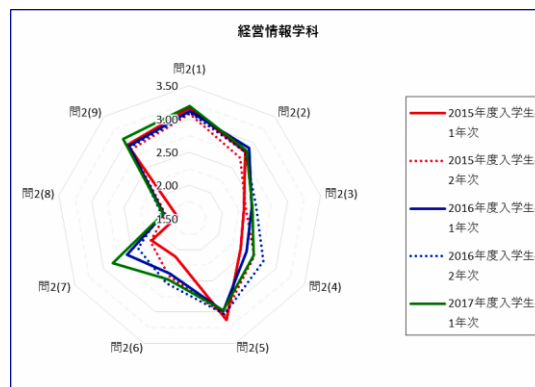
【2016 年度入学生】(図 2.2)

- ・ 全体としての推移は 2015 年とほぼ横ばい傾向にあるが、(3)、(4)、(6)、(8)が 2 年次に上昇している。評価レベルのバラツキも大きく、特に (3)、(6)、(7)、(8)の評価レベルが低い。
- ・ 2015 入学生に比べ、評価レベルがやや上昇している。

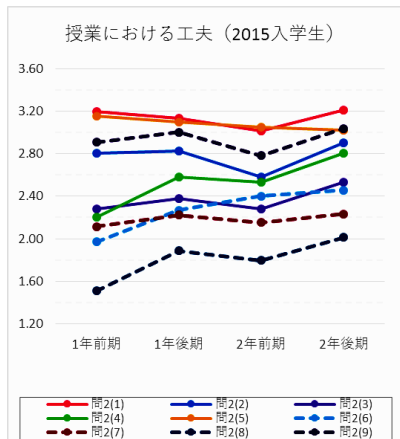
【2017 年度入学生】(図 2.3)

- ・ 2016 入学生に比べ、やや上昇しており、特に、(7)の上昇が顕著である。これは教員がアンケートの質問に回答や説明する頻度が上がったことによる。

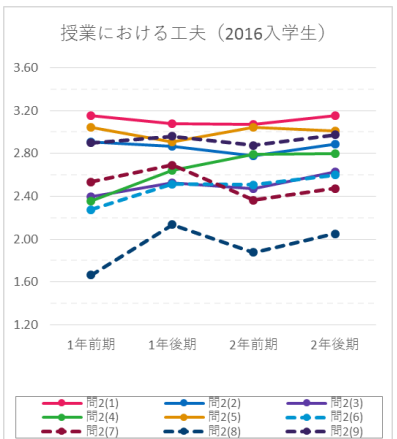
(図 2.4)



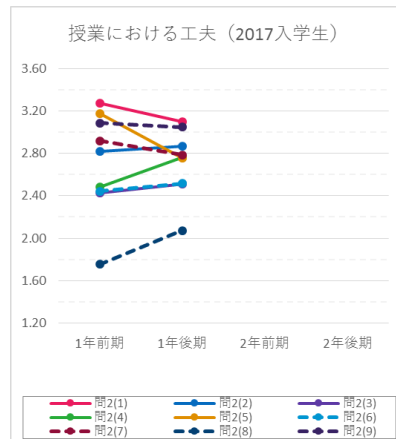
(図 2.1)



(図 2.2)



(図 2.3)



問2については、3年間を通して(1)と(5)が高く、教材の工夫や、レポートによる知識確認を学生が評価している。しかし、特に(8)の個別指導と、(3)の学生のグループワーク等への参加・協働学習の機会の評価が低かったが、近年学科ではグループワークの学修を取入れた科目を増やしてきている。(図2.4)

③問3「授業科目の目的・成績評価の方法等の理解に関する自己評価」について

【2015 年度入学生】(図3.1)

- ・ 傾向として1年次は上昇しているが、2年前期に顕著に低下し、2年後期に1年後期の水準に回復している。
- ・ 評価レベルのばらつきは少なく、また評価レベルは(1)、(4)、(2)、(3)の順に高い。特に(3)の「成績評価の方法」・「ルーブリック」の説明があり、理解できた)の評価が低い。

【2016 年度入学生】(図3.2)

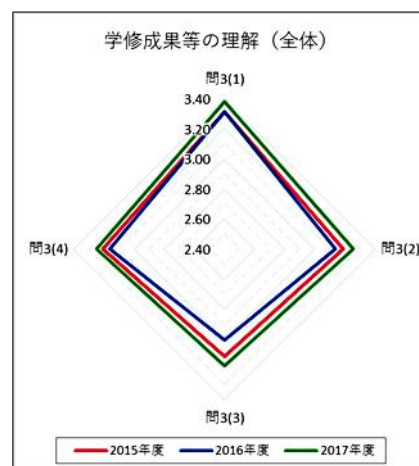
- ・ 傾向として2年前期まで横這いで、2年後期に上昇している。
- ・ また評価レベルについては2015年度入学生とほぼ同様である。

【2017 年度入学生】(図3.3)

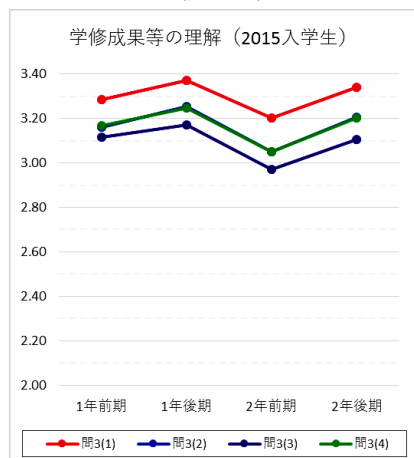
- ・ 傾向として2016年度入学生に比べ、大きく上昇している。
- ・ また評価レベルは1年後期に低下し、特に(4)「授業の内容」は、分かりやすく理解できた)の低下が大きく、授業内容がよく理解できていないことも考えられる。

問3については、特に(3)についての理解度が低い傾向があるので、これを深めさせることで学修意欲の向上につながることが推測される。

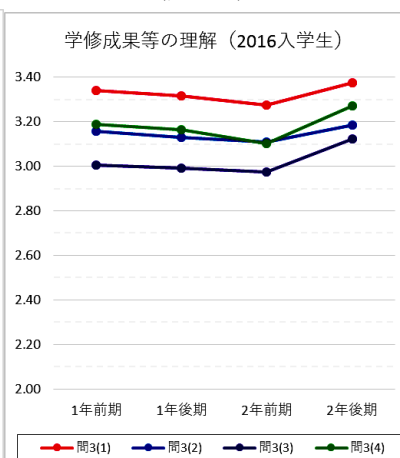
(図3.4)



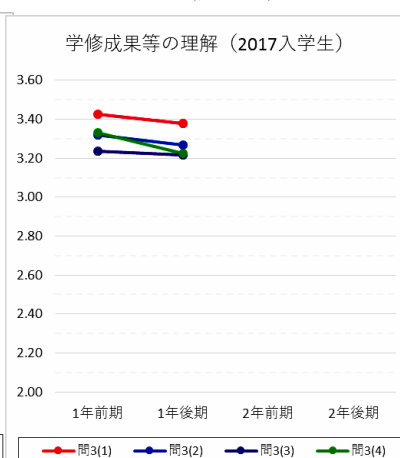
(図3.1)



(図3.2)



(図3.3)

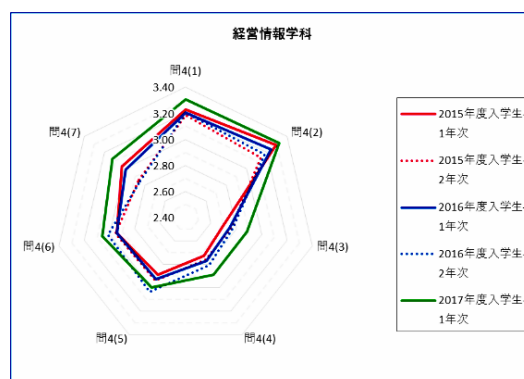


④問4「授業に関する効果・成果に関する評価」について

【2015 年度入学生】(図4.1)

- ・ 問4の傾向として2年次の前期に低下し、後期に戻している。
- ・ 評価レベルは、各期共に【(1)と(2)】、【(5)と(6)と(7)】、【(4)と(3)】の3つのグループに分散している。評価レベルは(1)「授業が興味・関心を喚起」と(2)「授業が職業に関する知識・技能・技術獲得で役立つ」が最も高く、(3)「文章力」、(4)「説明力」が最も低い。(5)「論理的思考力」、(6)「課題解決力」

(図4.4)



は2年後期に自己評価レベルが高まる。これは、専門演習の研究等で、課題解決や報告書作成で培われたと推測される。

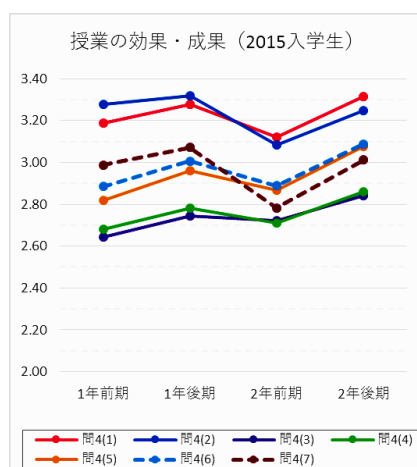
【2016 年度入学生】(図 4.2)

- ・ 評価レベルでは2015 年度入学生と比べ評価レベルがやや上昇し、特に(3)、(4)、(5)、(6) の上昇が顕著である。一方で(7)「社会性・人間性」の2 年前期の低下が顕著で、これは、就活の面接などで苦戦した学生が多少多かったためと推測される。

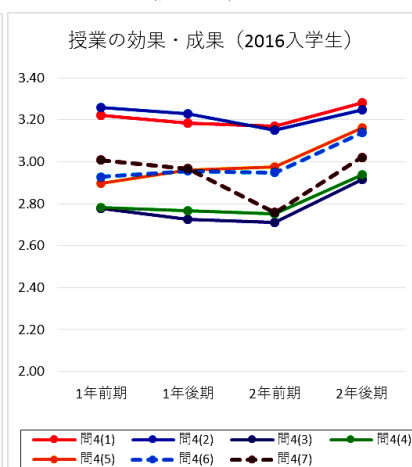
【2017 年度入学生】(図 4.3)

- ・ 評価レベルでは2016 入学生に比べ上昇しているが、但し、1 年後期にやや評価レベルが低下している。評価レベルは他の年度と同様に(1)と(2)が高く、(3)、(4)が低い。問 4 では、特に授業の(1)「興味・関心を喚起」と(2)「職業に関する知識・技能・技術獲得で役立つ」の評価レベルが高く、学修意欲の向上に繋がっていると推測される(図 4.4)。

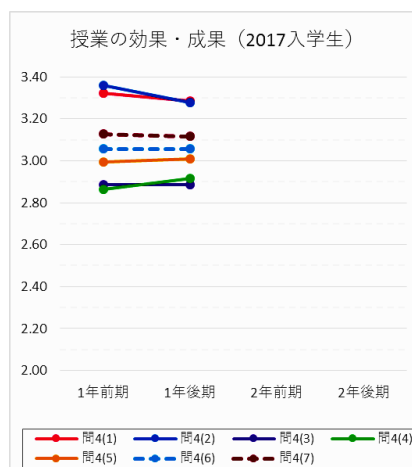
(図 4.1)



(図 4.2)



(図 4.3)



⑤問 5 「授業科目に対する総合評価」について

【2015 年度入学生】(図 5.1)

- ・ 問 5 の評価レベルは、2 年前期に低下(3.1)し、2 年後期に概ね戻して (3.3) いる。評価レベルは2 年前期以外が概ね 3.3～3.4 の範囲にあるが、2 年次の総合評価レベルが1 年次に比べて低下している。

【2016 年度入学生】(図 5.1)

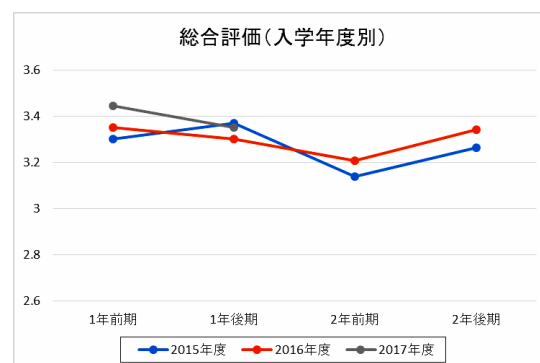
- ・ 問 5 の評価レベルの傾向は、2 年前期に低下し 2 年後期に概ね戻しており、それ以外ほぼ横ばいで推移している。
- ・ 2016 年度入学生の全体の評価レベル (3.3) は、2015 年度入学生 (3.26) よりやや高い。

【2017 年度入学生】(図 5.1)

- ・ 2017 年度入学生の評価レベルは、2016 年度入学生に比べ上昇しているが、但し、後期に低下している。
- ・ 2017 年度入学生の評価レベルは4 学科中で最もレベルが高い(経:3.4, 幼:3.29, 食・福:3.17)。

問 5 では、概して2 年次前期の総合評価レベルが、1 年次に比べて低下している。これは、学生が就活で企業と向き合うことにより、自己の評価レベルを厳しくしていることも推測される。

(図 5.1)



⑤ 問6 「授業における学修行動・意欲に関する自己評価」について
【2015 年度入学生】(図 6.1)

- ・ 2015 年度入学生については、全体としては特段の学修行動の改善が見られないが、それぞれの項目で次のような傾向がある。
- ・ (4)「授業中の発言」と、(5)「教員への質問・相談」は低い評価レベルであるが学年進行と共に、緩やかに改善されている。
- ・ (3)「宿題の遂行」と(8)「良い成績のための努力」は高い評価レベルで横這いである。
- ・ (6)「協働学習」と、(7)「自主的学修」は緩やかに悪化している。
- ・ (1)「欠席回数」は2年次に悪化しており、(2)「授業外学修時間」は2年後期に悪化している。

【2016 年度入学生】(図 6.2)

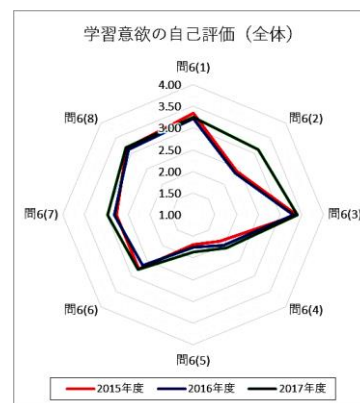
- ・ 2016 年度入学生については、全体としては特段の学修行動の改善が見られないが、それぞれの項目で次のような傾向がある。
- ・ (2)「授業外学修時間」では、2015 年度入学生に比べ、改善が見られる。
- ・ (5)は 2015 年度入学生よりやや改善しているが、(3)と、(8)は高い評価レベルで横這いである。
- ・ (1)「欠席回数」は2年次に悪化している。

【2017 年度入学生】(図 6.3)

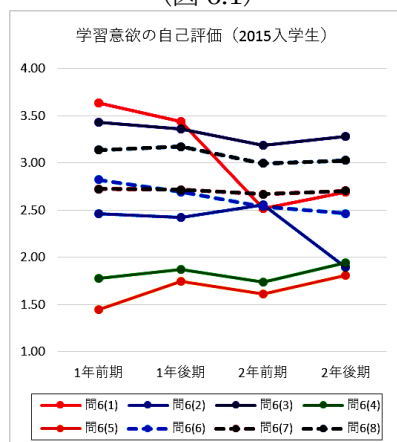
- ・ 2017 年度入学生の評価レベルは、2016 年度入学生に比べ、(4)、(5)を除き大幅に改善している。
- ・ 特に、(2)「授業外学修時間」では 2016 年 (2.5) から改善 (3.3) が顕著であるが、但し、後期にやや悪化している。

問6 は、全体に(3)と(8)は高い評価レベルであるが、(4)、(5)は低い評価レベルであり、(1)は2年次に低いレベルへ低下している(図 6.4)。

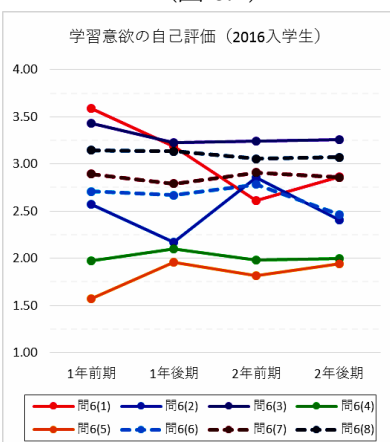
(図 6.4)



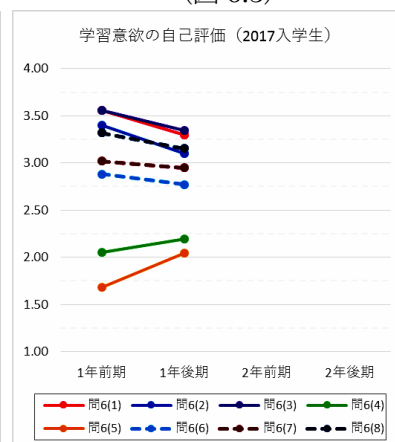
(図 6.1)



(図 6.2)



(図 6.3)

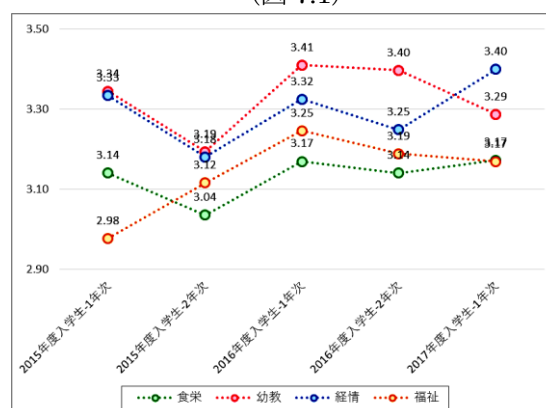


⑦まとめ

経営情報学科の評価レベルは、年度によって多少の波があるが、全体的に高い評価を挙げてきており、Web シラバスの利用による授業目的・授業内容・ルーブリック・授業外時間の学修時間と予習/復習内容・成績評価などで学生の授業目標の理解が深まり、また学科や個々の教員の教育改善の成果が少しずつ上がってきていることが推測される。

2015 年度入学生の評価は、4 学科の中で総合評価で高い評価となっており、また各問の評価でも高めの評価レベルを挙げていて、教員の授業改善の成果が挙がってきているものと推測される。

(図 7.1)

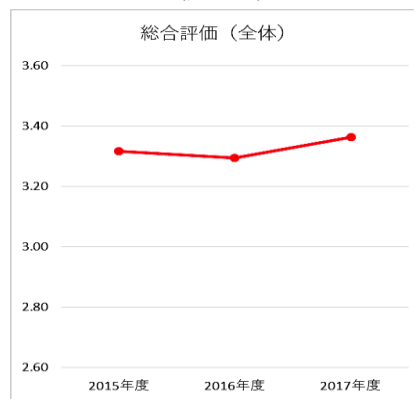


一方で2016年度入学生は、他の年度より全体的に少し評価が下がっているが、問いによっては（例えば問5の総合評価）2016年度でも良い評価が示されている。

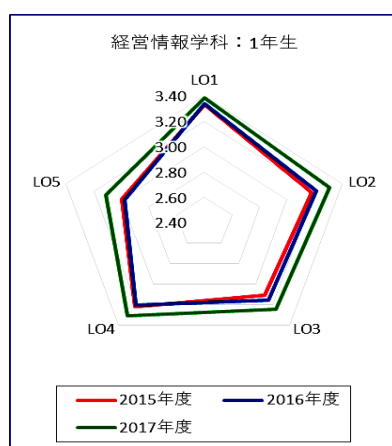
2017年度入学生の評価が、概してどの問でも高めの傾向がある。この入学年度は他の2ヵ年と制度などで大きな違いは無く、これは1年次だけの評価のためかと思われるが、今後の学生の評価を待つ必要がある。

次に、1年次から2年次について評価の傾向を見ると、各年次共LO1（知識・理解）の値が高く、次いでLO2（技能）とLO4（関心・意欲・態度）となっている。LO1とLO2が高いのは、経営情報学科では情報関連科目が多く、そのため学生が知識や技能が身に付いて理解してことを把握しやすいことも理由として推測される。それにより学生の授業に関心・意欲・受講態度が高まっていると思われる。

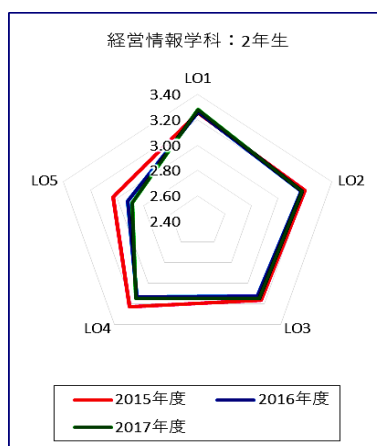
(図 7.2)



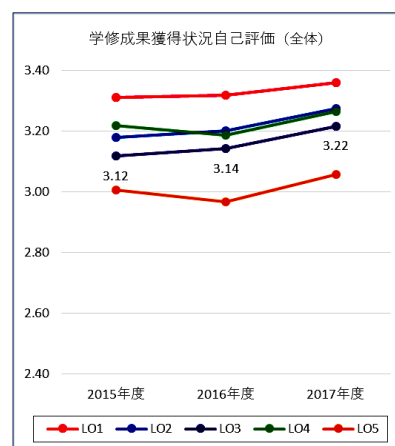
(図 7.3)



(図 7.4)



(図 7.5)



「(期末) 授業アンケート」結果の概要・分析から、経営情報学科では3つの大きな課題があることが分かった。

課題の1つ目は、各学年共LO5（人間性・社会性）の評価レベルが特に低いことである。また、LO5の評価レベルは各年度共1年次（3.0）から2年次に（2.8）へ低下する傾向がある。これは経営情報学科でインターンシップ以外には学外実習の機会が無く、自己の人間性や社会性の向上や、その評価レベルを把握し難いことが推測される。他のLO1やLO2、LO4で成果や身に付いたことを、LO5で自信を高める工夫が必要である。

課題の2つ目は、LO3（思考・判断・表現力）が、評価レベルが低めの傾向があることである。

また、課題の3つ目は、各年度共に2年前期の各問の評価が大きく下がることである。経営情報の学生は就職活動を主に2年前期に行っており、そのため、短大の授業に関することより就職活動への対応が多くなっていることや、また学生が実際に企業の採用で厳しい現実に向き合うことで、自己の評価レベルを厳しく見ていることが考えられ、その結果2年前期の評価レベルが低くなると推測される。

(2) 課題の背景・要因と改善方策

①LO（学修成果）が低い科目の背景・原因と分析

経営情報学科では、教育課程編成方針に基づいて「教養科目」と、以下の4分野から構成される「専門科目」（「経済・経営科目」、「会計科目」、「ビジネス実務・キャリア科目」、「情報科目」）の区分の教育課程で編成されている。

上記の⑦「まとめ」において、経営情報学科の3つの課題の中でLO5、LO3が低い点について、授業アンケートの関連する問いの質問項目で学生評価のレベルから、授業科目を選び、調べることにした。

A) LO5 に関する授業アンケートで調べる科目の抽出と分析

経営情報学科の教育課程の中で、同じ区分に属する科目を「科目群」として分類し、その科目群別に授業アンケートの問い毎の集計結果の相関マトリックスを求めた。その中で、LO5 に関する問 1 (5) について学生の評価レベルの高い科目と低い科目を 1 つずつ選び調べる。

まず、評価レベルの高いのは主に「ビジネス実務・キャリア科目」群でその中から「ビジネス実務演習 I」科目を選び、また評価レベルが低い「情報科目」科目の中から「日本語文書処理演習 I」科目について調べる。

「ビジネス実務演習 I」(2017 年 : 1 年前期) は演習科目でクラス別に行い、専任教員が担当する。

- ・ (授業内容) : 仕事に必要なビジネスマナー、企業実務の一般知識、並びにビジネス文書の作成技能等について学び、またインターンシップを行うにあたっての基本的知識・マナーなどを、講義とグループワークを併用して授業を行う。
- ・ (授業の評価) : 毎回の授業やグループワークの参加度や、授業アンケートの回答内容、小テスト、課題 (予習・復習)、期末定期試験等で評価する。
- ・ この授業では、学生評価は問 1 (5) で (3.41)、また相関が高い問 2(3)の「グループワークやディスカッションなど、学生の参加・協働学習の機会がある」で高い値(3.35)を示している。このことから学生はグループワーク等学生の参加・協働学習の機会が多くあり、グループワーク等で成果を纏め・発表する体験から学修することで、ビジネスで求められる人間性・社会性が向上したと判断していると推測される。

「日本語文書処理演習 I」(2017 : 1 年前期) は、演習科目でクラス別に行い、非常勤教員が担当する。

- ・ (授業内容) : ビジネス文書作成の基本的知識・技術の習得を、コンピュータとビジネスソフトを用いた演習で授業を行う。
- ・ (授業の評価) : 課題 (予習・復習) や、コンピュータを用いた実技の期末定期試験等で評価する。
- ・ この授業では、学生評価は問 1 (5) で (2.92)、また相関が高い問 2(3)の「学生の参加・協働学習の機会がある」でかなり低い値(1.67)を示している。LO5 に相関が高いアンケートの問 1 (5) が低い値は「情報科目」に多く、関連して「学生の参加・協働学習の機会がある」問の値も概して低い傾向がある。

B) LO3 に関する授業アンケートで調べる科目の抽出と分析

経営情報学科の科目群別に授業アンケートの問いに関する相関マトリックスの中で、LO3 に関する問いの問 1 (5) について学生の評価レベルの高い科目と低い科目を 1 つずつ選び調べる。

まず、評価レベルの高いのは主に「教養科目」群の「教養科目」でその中から「教養演習 I」科目を選び、また評価レベルが低いのは主に「教養科目」群の「語学科目」科目で、その中から「総合英語 I」科目について調べる。

- ・ 「教養演習 I」(2017 年 : 1 年前期) は、短大で学ぶための基礎力の修得と、①テキストの読解力、不理解個所の調査力、③内容の整理力、④資料作成力、プレゼンテーション力というビジネスパーソンが必要とする基礎的能力の育成を目的とする演習科目で、学科の全専任教員が 10 数名ずつ学生を担当する。
- ・ (授業内容) : 個々の教員で進め方は異なるが、主に教員の教材テーマの中から希望するものを自ら選択し、担当個所の文章の要約や不明個所の調査し、分かりやすい資料を作成して、プレゼンテーションして質疑応答を行う。
- ・ (授業の評価) : ①発表内容、②受講態度、③予習・復習、④毎回の授業アンケートの回答内容などで評価する。
- ・ この授業では、学生評価は問 1 (3) で (3.3) で、相関が高い問 1 (4)「主体的な学び・課題に取り組むことができる」で(3.48)や、問 4(1)「この授業が興味・関心を喚起」で高い値(3.56)を示している。このことから学生は自らが関心を持つ内容であれば主体的な学び・課題に取り組む意欲が増して、その結果として「授業で学修した知識・技能を活用して、当該分野の課題を解決あるいは表現・実践」することができる傾向があることが推測される。

「総合英語 I」(2017 : 1 年前期・後期) 科目は、演習科目でクラスを 2 グループに分けて専任教員

が担当する。

- ・（授業内容）：英語を正しい語順で理解するためにサイトトランスレーションによる読解を行い、その後に Listen & Repeat を行う。
- ・（授業の評価）：小テスト（70%）、口頭テスト（4回）、また Class Participation (30%)で評価する。
- ・この授業では、学生評価は問1(3)で(3.15)で、相関が高い問1(4)「主体的な学び・課題に取り組むことができる」で(3.21)や、問4(1)「この授業が興味・関心を喚起」で値(3.2)とやや低めの値を示している。

これは、学生の中に英語が苦手な者も一定の割合おり、そのために授業で学修した英語の知識・技能を活用して、課題を解決や、英語の知識・技能を活用して表現・実践する意欲が出ないことも推測される。

LO3（思考・判断力・表現力）については、1年次で学生の自己評価レベルが低く、2年次で改善の傾向があるが、企業などでは「考える力」と「判断力」が必須であり、今後共学生の考える力や判断力を育成する教育課程や、教育方法の改善を行う必要があると考える。

②2年前期の各問の学生評価が大きく下がる背景・原因と改善方策 （課題の改善方策）

経営情報学科では、各年度共に2年前期の各問の学生の自己評価レベルが大きく下がり、後期に回復する傾向がある。

これは経営情報学科の学生の就職活動が主に2年前期に集中しており、学生は短大の授業より就職活動への対応が多くなっている。そのため、個々の授業へ向き合うことが1年次より弱くなり、評価レベルが低下すると推測される。また、学生は、実際に企業の採用で厳しい現実に向き合うことで、自己のレベルを厳しく評価していることが考えられる。

さらに、経営情報学科では、履修モデルとしての目的と就活で活かすため、情報処理士など「大学実務教育協会」の資格を1年次に殆どの学生が取得している。その結果、学生は1年終了時に卒業時に必要な単位数の約75%程度を取得している。そのため、学生は2年次の取得単位数が少なく、2年前期にはある程度卒業が予想でき、就活等と相まって、履修者数が各年度共大きく減少している（表1）。同時に短大での授業に向き合う意欲が低下していることも評価レベルの低下に影響していると推測される。

企業は採用活動時に、学生が2年次に企業で必要な高いレベルの知識・技能の修得や、考える力や判断力を高めることを想定したある程度の伸びしろを期待して採用を行っていることが推測される。

しかし、現在の2年次の学生の評価レベルが低いままでは、学生が入社後に苦慮することが想定される。2年次の教育課程を検討すると共に、各科目で教員が学生への教授方法や指導方法の改善を検討することも必要であると考ええる。

入学年度・学年	（前期）延べ履修者数（人）	（後期）延べ履修者数（人）
2015年度1年	2,178	1,995
2015年度2年	878	374
2016年度1年	1,978	1,817
2016年度2年	853	395

【4】福祉学科

1. 学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

(1) 「5つの基準」別「学習成果」の具体的内容

【福祉学科が育成する人材像】

福祉学科では、本学科が育成する人材像の到達に向けて以下の学修成果に達し、本学の卒業要件を満たした者に短期大学士（介護福祉学）の学位を授与します。

【「育成する人材」に必要な力】

- ① 人間の幸せ、社会のあり方に理解を深め、さまざまな人とコミュニケーションを取ることができる力
- ② 福祉に関するさまざまな分野で、修得した専門的知識・技術を活用し、自己研鑽を続けていくことができる力
- ③ 高い知性と広い教養を持ち、地域社会の発展に貢献できる力

【「5つの基準」別「学習成果」】

(LO1) 知識・理解

人間の多様な価値観、社会のしくみ、文化など、幅広い教養を身につけている。また、福祉の基本理念、介護福祉、相談援助、福祉ビジネスなどに関する基礎的な知識を身につけている。

(LO2) 技能

人間の尊厳とその人らしい自立した生活を支援するために必要な介護の技術・技能を身につけている。また、相談援助分野や福祉ビジネス分野に求められる基礎的な技能を身につけている。

(LO3) 思考力・判断力・表現力

福祉分野の諸課題に対し、研究方法を用いて考察することができる。また、介護福祉分野や相談援助分野、福祉ビジネス分野で有効な思考・判断・表現の能力を身につけている。

(LO4) 関心・意欲・態度

現代社会の動向に関心を向けることができる。自分で課題に取り組む力を身につけている。社会人、職業人として求められる自己効力感や自己肯定感を持つことができる。

(LO5) 社会性・人間性

他者に共感でき、多様な価値観を受容する姿勢を身につけている。また、社会のルールの下、他者と協調、協働して行動することができる。

(2) 「5つの基準」別「教育内容・方法・評価方法」の具体的内容

(LO1) 知識・理解

【教育内容】 教養科目群による幅広い教養や一般常識、専門科目群による介護福祉並びに相談援助や福祉ビジネスにおける知識の獲得を図る。

【教育方法・学修方法】 講義科目と演習・実習科目ともに視覚教材の有効活用やアクティブ・ラーニングの導入により、学生の興味関心を高めながら知識と理解の向上につなげる。

【学修成果の評価方法】 筆記試験やレポートなどで評価。

(LO2) 技能

【教育内容】 講義に連動した演習や実習の科目で、学修段階に応じた技能の修得を目指す。

また「教養演習」において表現技法の修得や伝達能力・文書作成力などの向上を目指す。

【教育方法・学修方法】 少人数での演習や実習形式の授業に重きを置く。情報処理や文書作成などの学修に取り組むなかで、パソコン操作の習熟を目指す。

【学修成果の評価方法】 演習による到達度の確認や、外部指導者などによる評価

(LO3) 思考力・判断力・表現力

【教育内容】 「総合的研究」を必修科目とし、研究の手法やマナーの基本を習得する。その

他の授業でも可能な限りアクティブ・ラーニングを取り入れて、思考力・判断力・表現力を高める。

【教育方法・学修方法】 グループワーク、プレゼンテーション、その他の手法を用いて、自らの思考・判断を表現するとともに、他者の意見を参考に自分の思考を拡げる機会を持つ。

【学修成果の評価方法】 成果物の発表、意見発表、レポートや研究論文などを評価。

(LO4) 関心・意欲・態度

【教育内容】 社会の動きや福祉問題への関心を高める。また、関連領域の基礎的な学修を早くから取り入れ、主体的に学ぶ態度を養う。

【教育方法・学習方法】 課題や目標に、自分の力で計画的に取り組ませる。全体の中で評価をおこない、自信につなげる。

【学修成果の評価方法】 課題の取り組み状況、受講態度、実習等の受入先の評価など。

(LO5) 社会性・人間性

【教育内容】 介護実習やインターンシップ、授業でのグループワークなどを通じて、多様性の理解や共感する心を育む。また、ボランティア活動を通じて思いやりの心や社会貢献活動の意義を学ぶ。

【教育方法・学修方法】 課外活動の積極的展開と振り返りの実施。実習やインターンシップでの指導など。

【学修成果の評価方法】 外部からの評価も取り入れながら、自己評価の内容も加味して評価。

2. 「(期末) 授業アンケート」結果の概要・分析と学科の課題・改善方策

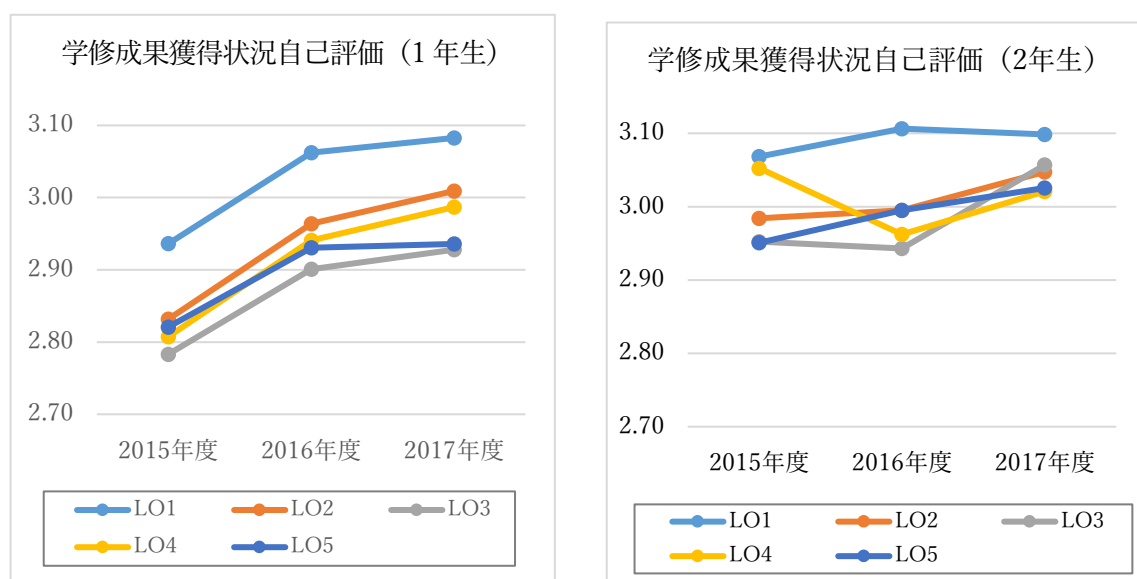
(1) 「学修成果」の全体的な概要と分析～(問1)～(問6) 別・入学年度別

① (問1) 授業科目における、「学修成果」の到達度に関する自己評価

2015 年 LO1 を除き、比較的バランスのとれた自己評価となっている。但し、自己評価レベルはやや低い。

2016 年 1 年次の評価レベルは、2015 年入学生より上昇した。また、2 年次の LO3・LO5 の上昇が顕著であった。LO5 除き、比較的バランスのとれた自己評価となっているものの、自己評価レベルはやや低い。

2017 年 2016 年入学生に比べ、やや改善がみられる。1 年次自己評価レベルはやや低い。



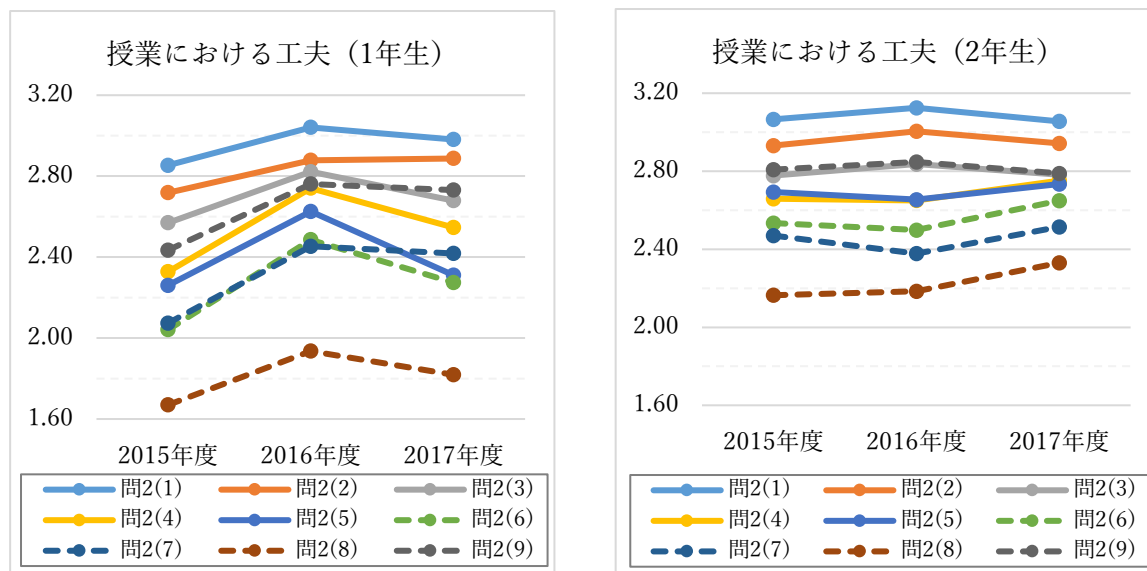
(問1) 授業科目における、「学修成果」の到達度に関する自己評価グラフ

② (問 2) 授業科目の「授業形態・方法」に関する評価

2015 年 (6)(7)(8) の評価が低かった。

2016 年 (6)(7) が上昇し、改善が見られた。2 年次の評価レベルはバランスのとれたものになった。2015 年入学生より評価レベルが上昇した。

2017 年 2016 年に対して、ほぼ同じレベルで推移した。



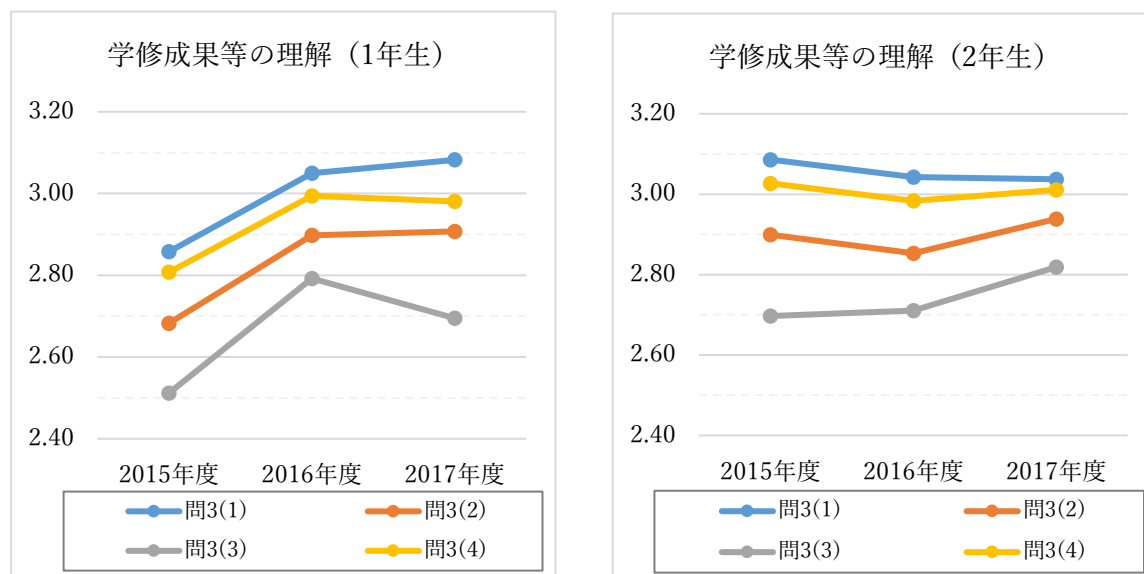
(問 2) 授業科目の「授業形態・方法」に関する評価グラフ

③ (問 3) この授業の目的や「学修成果」、成績評価の方法・基準、内容についてどの程度理解できましたか。

2015 年 2 年次に大きく上昇した。ただし、評価レベルは相対的に低い。

2016 年 全体として横ばいで推移した。(2)(4)はやや上昇し、(1)(3) はやや低下した。2 年次の評価レベルは 1 年次より上昇した。

2017 年 (3)を除き、2016 年入学生に比べ上昇した。1 年後期に上昇が見られる。



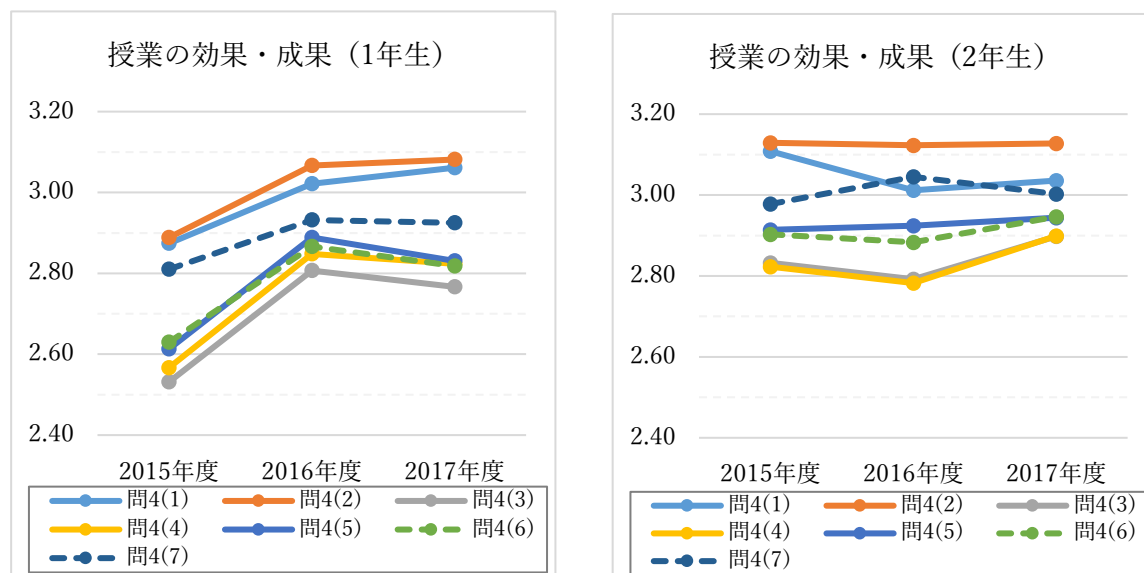
(問 3) この授業の目的や「学修成果」、成績評価の方法などへの理解程度のグラフ

④ (問 4) この授業の効果・成果について、どのように評価しますか。

2015 年 2 年次に大きく上昇した。(7)の評価レベルが比較的高い。

2016 年 2 年次に上昇。ただし、2 年後期は低下した。評価レベルは安定して変化しない傾向が見られる。2015 年入学生と比べて、評価はやや上昇している。

2017 年 2016 年入学生とほぼ同傾向である。



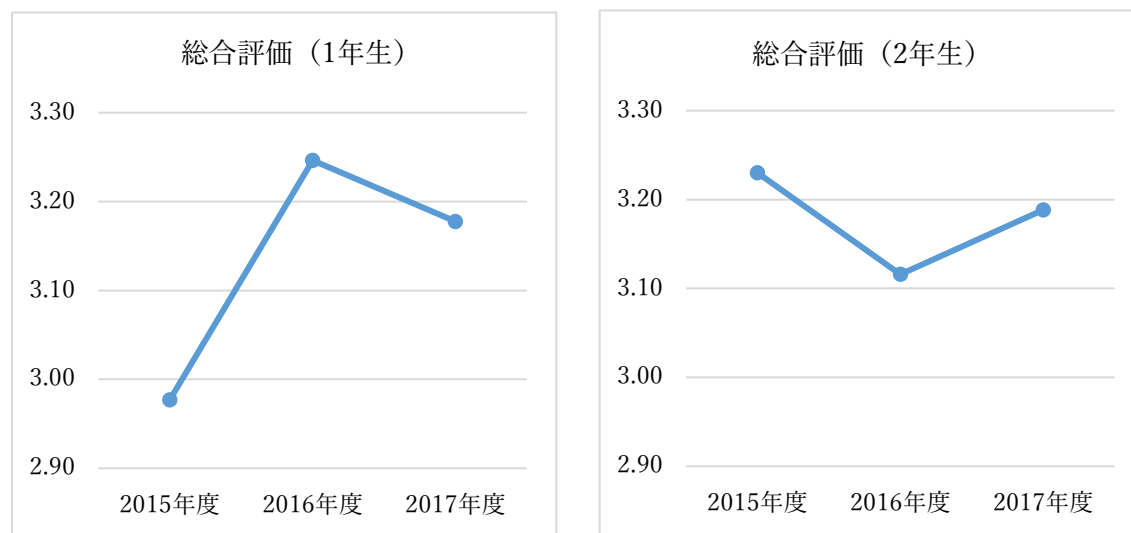
(問 4) この授業の効果・成果についての評価のグラフ

⑤ (問 5) あなたにとって、この授業は、総合的にみて良かったと思いますか。

2015 年 大幅に上昇した。とくに 2 年後期に上昇した。

2016 年 2 年後期に大きく低下したが、全体の評価レベルでは 2015 年入学生を上回った。

2017 年 2016 年入学生に比べ、やや低下した。



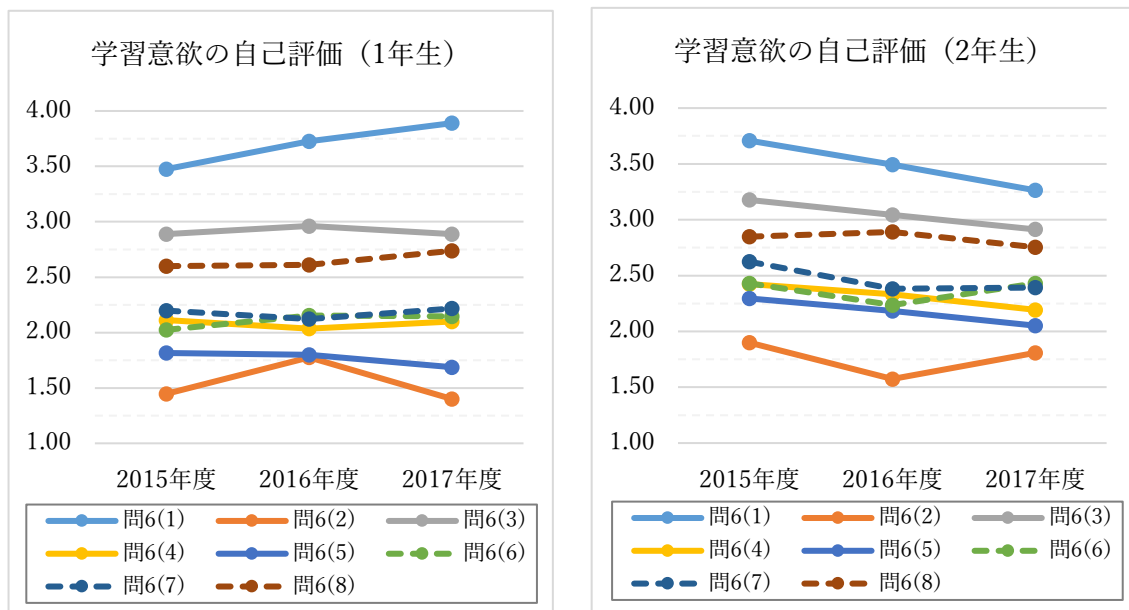
(問 5) 総合評価グラフ

⑥ (問 6) あなた自身は、この授業にどのように取り組みましたか。

2015 年 すべての項目で、学修行動の顕著な改善が続いた。欠席回数と授業外学習時間について、2 年次にも低下が見られなかった。

2016 年 特段の学修行動の大きな変化はみられなかったが、欠席回数の悪化が見られた。

2017 年 2016 年入学生に比べて全体的に改善。



（問 6）学生自身の授業への取り組みへの評価のグラフ

（２）（１）の背景・要因・原因の解釈・分析

福祉学科の学年・学期には、2年次後期に大きな特徴がある。介護福祉士を目指す学生については、国家試験合格のため、また、医療事務・福祉事務資格取得を目指す学生も、資格試験対策にそれぞれ多くの時間を割くことである。

これらの試験対策では、おおよそ実力の維持を中心とすればよいグループと、合格のために学力向上が必要なグループに分かれ、とくに学力向上を必要とするグループには少人数を手厚く指導する体制が取られる。このような背景が2年次後期における諸評価の特異性につながるものと思われる。

①（問 1）授業科目における、「学修成果」の到達度に関する自己評価

2015～2017年入学生ともに、他学科と比べて自己評価がやや低い。LO1 他に比べて高いことから、実習で利用者と接し、現場での判断力や実技の難しさを痛感することがこのような評価の原因となっているのではないかと。「現場力」ともいえるべき総合力が求められるものであろう。

②（問 2）授業科目の「授業形態・方法」に関する評価

「(8) 個別指導や補習が行われた」が上昇するのは、2年次後期の資格取得に向けた指導への評価と考えられる。その他の課題・アンケートへのフィードバックも教員の努力の成果であろう。

③（問 3）この授業の目的や「学修成果」、成績評価の方法・基準、内容についての理解

ウェブシラバスを用い、本項目を学生に理解させる努力は行っているものの、まだ十分とは言えない部分もあり、本項目の充実が福祉学科の教育課程の課題の一つである。

④（問 4）この授業の効果・成果について、どのように評価しますか。

「将来の職業に関連する知識や技能・技術を獲得する上で役立った」「自分の興味・関心を喚起するものだった」に加え、「社会に出ていく上で必要な社会性・人間性を高める上で役立った」ことが高く評価されていることが大きな特徴であり、介護および福祉ビジネスの従事者としての資質を高める教育ができた。

⑤（問 5）あなたにとって、この授業は、総合的にみて良かったと思いますか。

総合評価としては、2015年入学生は2年後期に上昇したものの、翌年は逆に2年後期の低下が見られ、一進一退の様相である。2年次後期の資格試験対策は、個々の学生によって評価の分かれるところでもあり、その影響も考えられる。やや低下する傾向があることに注意する必要がある。

⑥（問6）あなた自身は、この授業にどのように取り組みましたか。

改善の続いた2015年入学生に対して、2016年・2017年では2年生になってからの欠席回数の増加が懸案である。いずれも、期末試験の受験資格を失うほどのものではない。どの年の入学生も自宅学習の時間が少なく、自宅学習の習慣を身につけさせる必要がある。

（3）学科にとってのインプリケーション

①自宅での学習について

短期大学は経済的に課題を抱えている学生も少なからずいることもあって、アルバイトでの時間拘束があることが推測される。アルバイトで疲労が蓄積したり睡眠時間が削られたりすると、授業に遅れてきたり授業中に寝てしまうことにつながりかねない。結果として、予習復習の時間すら取れないことになる。

介護福祉士の国家試験の不合格者の傾向として、遅刻や欠席が目立つ学生に集中していることもあり、まずは正しい生活リズムを確立させ、少しでも自宅学習の時間を確保させる意識付けが一番の対策のように感じられる。

②資格取得のための2年後期の取組みについて

学習効率と学生の個別指導を考慮すると学力によるグループ編成が求められるわけだが、学生の中には上位の班と下位の班とでは周囲の目を気にする者がいないとも限らず、必ずしも満足度につながるかはわからないままである。ただ、今回の国家試験では全国の養成校での合格率とほぼ同じ成績（約88%）を残せたので、学生には納得してもらえているのではないかと考える。

4 学科の中では福祉学科だけが国家試験を受験する事情を抱え、空きコマをほとんど受験対策に充てているため、余裕のない学生生活を強いることにもなっている。その分、合格率を上げることで保護者へも理解していただけるよう努めていかなくてはならない。

③進路予定が混在する学生の傾向と対策

福祉学科は介護福祉分野、福祉ビジネス分野、そして四年制大学への3年次編入学を目指すソーシャルワーク分野の3つからなる教育課程という特徴がある。そのため、1年前期の間は進路が固まっておらず、1年後期の学びの中で徐々に進路を絞っていく学生もいる。そのため、授業への関心度、集中度においても進路が固まるまでは高まりにくいことも懸念される。

なかには、福祉ビジネス分野を志して入学してきたけれど、結果的に介護福祉分野に就職する学生もいることから、進路決定を急がせるのも難しく、一人ひとりに向き合いながらの進路指導が不可欠となっている。

（4）総 括

福祉学科では、① 人間の幸せ、社会のあり方に理解を深め、さまざまな人とコミュニケーションを取ることができる力、② 福祉に関するさまざまな分野で、修得した専門的知識・技術を活用し、自己研鑽を続けていくことができる力、③ 高い知性と広い教養を持ち、地域社会の発展に貢献できる力を育成する人材の力として設定し、教育に取り組んでいる。

国家試験である介護福祉士試験だけでは①のコミュニケーション力を必ずしも裏づけできるものではなく、日頃のGP活動をはじめとするボランティア活動への積極的な参加や現場実習での学びを推進していく支援をさらに充実させていきたい。

また、②の卒業後の自己研鑽という点では、必修で貸している総合的研究での研究そのものの理解を深める取組みが肝心だと考えている。併せて、卒後教育の機会となっているリカレントセミナーの充実など、教育課程以外の部分でも取り組みを進めていきたい。

③の地域社会の発展に貢献できる力という点では、介護福祉分野や福祉ビジネス、ソーシャルワーク分野といった多方面で活躍できる人材を輩出するという教育課程の発展を目指して、今後も改善に尽力するものである。

【5】専攻科食物栄養専攻

1. 専攻科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー

(1) 「5つの基準」別「学習成果」の具体的内容

【専攻科食物栄養専攻が育成する人材像】

専攻科食物栄養専攻では、短期大学卒等の栄養士を対象に、管理栄養士育成と学士（栄養学）取得を目指し、以下の能力を修得し、本学学則に定める修了要件を満たした者に専攻科修了を認定します。

【「育成する人材」に必要な力】

- ① 栄養と健康に関する高度な専門知識・理解力
- ② 栄養管理の現場に即した技術・実践力
- ③ 栄養状態の分析力と栄養管理計画の立案能力
- ④ 問題を創造的に解決する能力
- ⑤ 高い職業倫理と全人的な総合力

【能力基準別到達目標（学修成果）】

(L01) 知識・理解	個人や集団に適切に栄養管理や栄養指導を行うための高度な専門知識と理解力を修得している。
(L02) 技能	高度な知識を基に、職務を遂行するための技術・実践力を修得している。
(L03) 思考力・判断力・表現力	栄養状態や病態を分析・把握し、適切な栄養管理計画が立案できる。
(L04) 関心・意欲・態度	自然および人間社会の現象に関心があり、意欲的に行動ができ、真摯な態度をもっている。
(L05) 人間性・社会性	栄養管理の専門職に相応しい全人的な総合力が備わっている。また、積極的に社会貢献することができる。

(2) 「5つの基準」別「教育内容・教育方法・評価方法」の具体的内容

(L01) 知識・理解

【教育内容】

主として知識・理解を養う科目には、専門科目 A 群【講義科目】の「栄養に関する総合的な科目」3 科目、「人体の仕組みに関する科目」5 科目、「食物に関する科目」3 科目、「臨床栄養に関する科目」2 科目、「公衆栄養に関する科目」2 科目、「保健衛生に関する科目」3 科目、「栄養指導に関する科目」4 科目および関連科目 8 科目の計 30 科目がある。

【教育方法・学修方法】

講義形式が主体である。ただし、どの科目においても、アクティブ・ラーニングを導入し、学生が主体的に学ぶように工夫をし、学生自身が考え、理解する力を養う。

【学修成果の評価方法】

主に筆記試験による客観テスト。

(L02) 技能

【教育内容】

主として技能・技法を養う科目には、専門科目 B 群【演習・実験・実習科目】の「栄養に関する演習・実験・実習科目」8 科目がある。

【教育方法・学修方法】

演習、実習、実験をととして、専門的技能・技術の習得を目指す。

【学修成果の評価方法】

技術試験および筆記試験による客観テスト。

(LO3) 思考力・判断力・表現力

【教育内容】

思考力、判断力、表現力を養う科目には、専門科目 A 群【講義科目】、専門科目 B 群【演習・実験・実習科目】及び関連科目のすべての科目が対象であり、どの科目においても、学生自らが思考、判断、表現が必要となる。

【教育方法・学修方法】

講義、演習、実験、実習の多様な形態で、アクティブラーニングを導入し、学生が主体的に学べるようにする。

【学修成果の評価方法】

技術試験および筆記試験による客観テスト又はレポートによる評価。

(LO4) 関心・意欲・態度

【教育内容】

関心・意欲・態度を養う科目には、専門科目 B 群【演習・実験・実習科目】の「栄養に関する演習・実験・実習科目」8 科目および関連科目の「特別研究」がある。その他にも、学生評価の高い科目「臨床医学Ⅰ・Ⅱ」「食品学特論」「臨床心理学特論」などが該当する。

【教育方法・学修方法】

体験学習を主体とする演習・実験・実習により、学生が主体的に学べるようにする。また、講義でも様々な教育手法を導入して学生の関心、意欲、態度を養う努力をする。

【学修成果の評価方法】

技術試験および筆記試験による客観テスト又はレポートによる評価。

(LO5) 人間性・社会性

【教育内容】

全人的な総合力を育成するために必要な人間性・社会性を養う科目には、関連科目 7 科目および専門科目 B 群【演習・実験・実習科目】の「栄養に関する演習・実験・実習科目」8 科目がある。

【教育方法・学修方法】

体験学習を主体とする演習・実験・実習により、学生が主体的に学べるようにする。

【学修成果の評価方法】

技術試験および筆記試験による客観テスト又はレポートによる評価。

2. 「(期末) 授業アンケート」結果の概要・分析と専攻科の課題・改善方策

(1) 「学修成果」の全体的な概要と分析

問1 "この授業では、授業を通じて獲得できる力(=「学修成果」)を到達目標として説明してありますが、皆さんは、どの程度「学修成果」を獲得したと自分で評価しますか。

下記の「学修成果」について自己評価してください。なお、該当しない「学修成果」につきましては、「E. まったく身に付かなかった」評価でも構いません。"

・年度ごとに、専攻科1年生の学習成果の自己評価が上昇している。 → 入学生の学習成果に対する意識が異なる。異なる母集団が入学している。年を追うごとに、自己肯定感が高い学生が入学している。

(毎年、教員は各自授業改善に取り組んでいるが、2年生の自己評価が上がっていないため、教員の教育力が上がったとは考えにくい。)

・専攻科2年生の学習成果の自己評価は、年度による変化は少ない。しかし、自己評価は低くもないが高いとも言えない。 → 2年生になると、専門科目が増えて学習内容の難易度が高くなるため、授業の消化不良となる学生が増えている。これが学修成果の評価を下げていると考えられる。

・専攻科1年生と2年生の比較では、2015年入学生ではほぼ変化なし、2016年入学生でもほとんど変化していない。 → 自己評価による学習成果はそれなりに得られていると考えられる。

・LO1～5において、概ね傾向は同じである。

問2 この授業では、「学修成果」を高めるために、どのような工夫がなされていましたか。

・年度ごとに、専攻科1年生の授業における工夫の評価が異なり、やや上昇している。また、質問内容により評価にばらつきがみられる。 → 入学生の授業における工夫の評価が異なり、異なる母集団が入学している。年を追うごとに、教員の授業工夫への関心が高い学生が入学している。

(毎年、教員は各自授業改善に取り組んでいる。2年生の評価が多少上昇しているため、教育力が上昇した教員がいるようである。)

・専攻科2年生の授業における工夫の評価は、年度によりやや右肩上がりではあるが変化は少ない。質問内容により評価にばらつきがみられる。 → 毎年、FD・SD研修会では授業事例報告をしており、本学では教員ごとに担当授業における創意工夫がなされている。ただ、授業の中で展開できる工夫には限界があり、一人の教員が問(1)～問(8)すべてをこなすのは物理的に不可能である。そのため、評価の低い項目がいくつか存在するのはむしろ当然と言えるだろう。

・専攻科1年生と2年生の比較では、2015年入学生ではほぼ変化なし、2016年入学生でもほとんど変化していない。 → 授業における工夫の評価は、項目により大きく差があるが、概ね普通と言えるようだ。

問3 この授業の目的や「学修成果」、成績評価の方法・基準、内容についてどの程度理解できましたか。

・年度ごとに、専攻科1年生の学習成果等の理解が上昇している。 → 入学生の学習成果等の理解に対する意識が異なり、異なる母集団が入学している。年を追うごとに、自己肯定感が高い学生が入学している。

(毎年、教員は各自授業改善に取り組んでいるが、2年生の評価が上がっていないため、教員の教育力が上がったとは考えにくい。)

・専攻科 2 年生の学習成果等の理解の評価は、年度による変化は少なく、評価は低くもないが高いとも言えない。 → 2 年生になると、専門科目が増えて学習内容の難易度が高くなるため、授業の消化不良となる学生が増えている。これが学習成果等の理解の評価を下げている可能性がある。

・専攻科 1 年生と 2 年生の比較では、2015 年入学生も 2016 年入学生も、ほとんど変化していない。
→ 学習成果等の理解はそれなりに得られていると考えられる。

問 4 この授業の効果・成果について、どのように評価しますか。

・年度ごとに、専攻科 1 年生の授業の効果・成果が上昇している。 → 入学生の授業の効果・成果に対する意識が異なり、異なる母集団が入学している。年を追うごとに、自己肯定感が高い学生が入学している。

(毎年、教員は各自授業改善に取り組んでいるが、2 年生の評価が上がっていないため、教員の教育力が上がったとは考えにくい。)

・専攻科 2 年生の授業の効果・成果の評価は、年度による変化は少なく、評価は 2.4～3.2 であり、概ね良好と言えるかもしれない。 → 2 年生になると、専門科目が増えて学習内容の難易度が高くなり授業の消化不良となる学生がいる中で、学生が授業の効果や成果を実感しているようだ。

・専攻科 1 年生と 2 年生の比較では、2015 年入学生も 2016 年入学生も、ほとんど変化していない。
→ 授業の効果・成果はそれなりに得られていると考えられる。

問 5 あなたにとって、この授業は、総合的にみて良かったと思いますか。

・年度ごとに、専攻科 1 年生の総合評価が上昇している。 → 入学生の授業の効果・成果に対する意識が異なり、異なる母集団が入学している。年を追うごとに、自己肯定感が高い学生が入学している。

(毎年、教員は各自授業改善に取り組んでいるが、2 年生の評価が上がっていないため、教員の教育力が上がったとは考えにくい。)

・専攻科 2 年生の授業の効果・成果の評価は、年度による変化は少なく、評価は 2.75～3.1 であり、概ね良好と言えるかもしれない。 → 2 年生になると、専門科目が増えて学習内容の難易度が高くなり授業の消化不良となる学生がいる中で、学生が本学専攻科の授業に対して総合的に見て概ねよいという評価をしている。改善点はまだまだあるが、教育の方向性は間違っていないようである。

・専攻科 1 年生と 2 年生の比較では、2015 年入学生も 2016 年入学生も、ほとんど変化していない。
→ 総合評価はそれなりに得られていると考えられる。

問 6 あなた自身は、この授業にどのように取り組みましたか。

・専攻科 1 年生の学習意欲の自己評価は年度ごとに変化していない。また、質問内容により評価にばらつきがみられる。 → ほぼ全学生が真面目に大学に来て勉学に努めている。日常の予習・復習時間が確保されていないのは気がかりではあるが、日常の授業が 9 時から 16 時・18 時までである上に帰宅後さらに予習・復習をするとすると、食事と睡眠時間以外は終始勉学に励まなければならない。また、多くの学生がレポート作成のための時間をこれに含めていないため、実際には評価はもう少し高くなると思われる。

・専攻科 2 年生の学習意欲の自己評価も、年度による変化は少なく、質問内容により評価にばらつきがみられる。 → 専攻科 1 年生と同様に、ほぼ全学生が真面目に大学に来て勉学に努めている。日常の予習・復習時間が確保されていないのは気がかりではあるが、日常の授業が 9 時から 16 時・18

時までである上に帰宅後さらに予習・復習をするとなると、食事と睡眠時間以外は終始勉強に励まなければならない。また、多くの学生がレポート作成のための時間をこれに含めていないため、実際には評価はもう少し高くなると思われる。

・専攻科1年生と2年生の比較では、2015年入学生と2016年入学生において、ほとんど変化していない。→ 学習意欲の自己評価は、項目により大きく差はあるが、勤勉な学生がほとんどであり、概ね良好と言えるようだ。

（2）学科にとってのインプリケーション・課題と改善方策

専攻科食物栄養専攻では、「短期大学卒等の栄養士を対象に、管理栄養士育成と（独）大学評価・学位授与機構の学士（栄養学）取得をめざし、以下の能力を修得し、本学学則に定める修了要件を満たした者に、専攻科修了を認定すること」をディプロマ・ポリシーとしている。

- ① 栄養と健康に関する高度な専門知識・理解力
- ② 栄養管理の現場に即した技術・実践力
- ③ 栄養状態の分析力と栄養管理計画の立案能力
- ④ 問題を創造的に解決する能力
- ⑤ 高い職業倫理と全人的な総合力

これらの能力の習得は容易ではなく、そのため、教職員は、毎年、個々の学生の育成に全力を注いでいる。

教育における課題を上げたら限がないくらいあるが、授業・教育の改善には、大学では全学 FD・SD 研修を、学科では学科内 FD を、教員個人では自己研鑽を定期的実施して取り組んでいる。しかし、最終的には各教員の努力に委ねるしかない。

富山短期大学（2015～2017年度）期末の授業アンケート 集計結果

食物栄養学科

入学年度	2015	2015	2016	2016	2017
学年	1年	2年	1年	2年	1年
履修者数	2,884	2,594	2,191	2,057	2,373
回答者数	2,040	1,865	1,832	1,536	1,836
回答率	70.7%	71.9%	83.6%	74.7%	77.4%

幼児教育学科

入学年度	2015	2015	2016	2016	2017
学年	1年	2年	1年	2年	1年
履修者数	3,590	3,697	2,986	2,983	2,611
回答者数	2,939	1,902	2,409	1,537	2,089
回答率	81.9%	51.4%	80.7%	51.5%	80.0%

経営情報学科

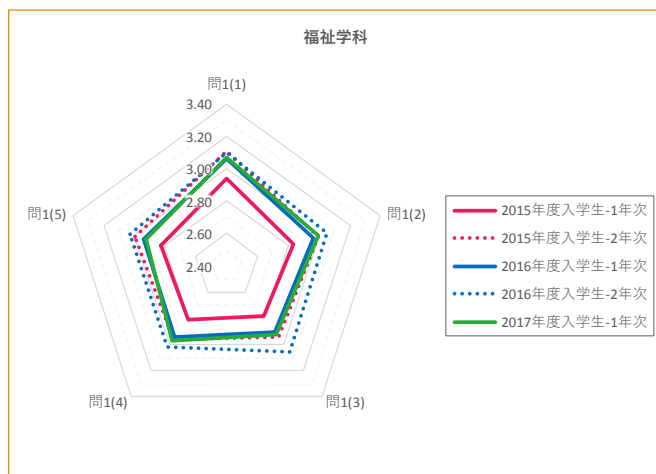
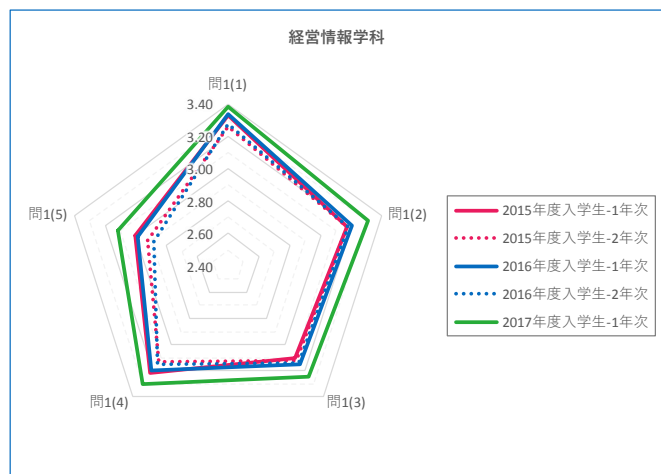
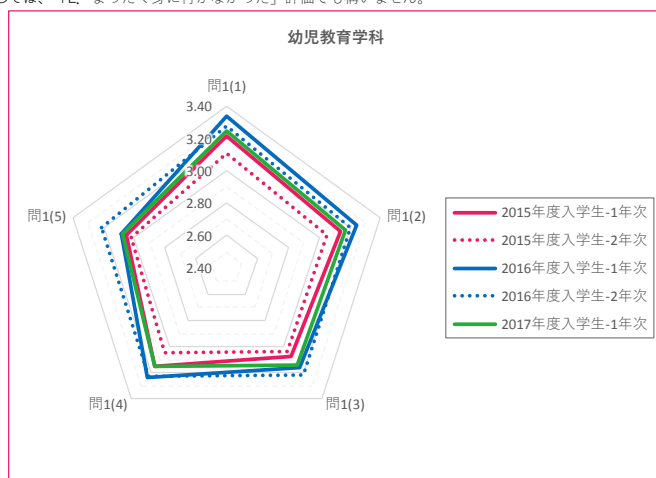
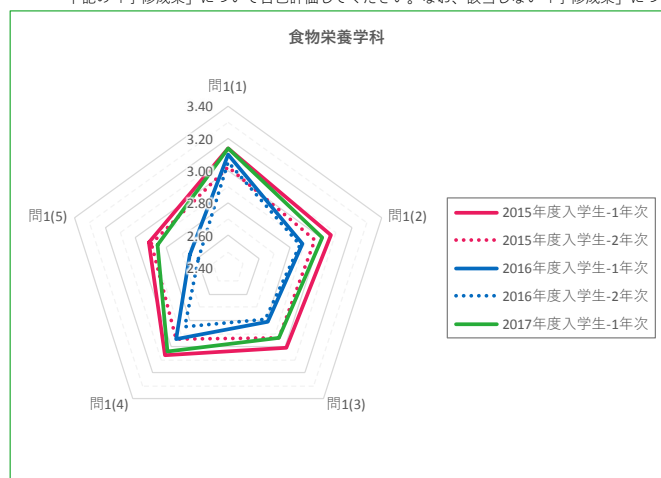
入学年度	2015	2015	2016	2016	2017
学年	1年	2年	1年	2年	1年
履修者数	4,502	1,569	3,937	1,432	4,243
回答者数	3,520	1,044	3,791	1,228	3,810
回答率	78.2%	66.5%	96.3%	85.8%	89.8%

福祉学科

入学年度	2015	2015	2016	2016	2017
学年	1年	2年	1年	2年	1年
履修者数	1,020	870	1,199	1,011	1,159
回答者数	739	423	884	874	766
回答率	72.5%	48.6%	73.7%	86.4%	66.1%

I. 授業で獲得できた「学修成果」に関する自己評価

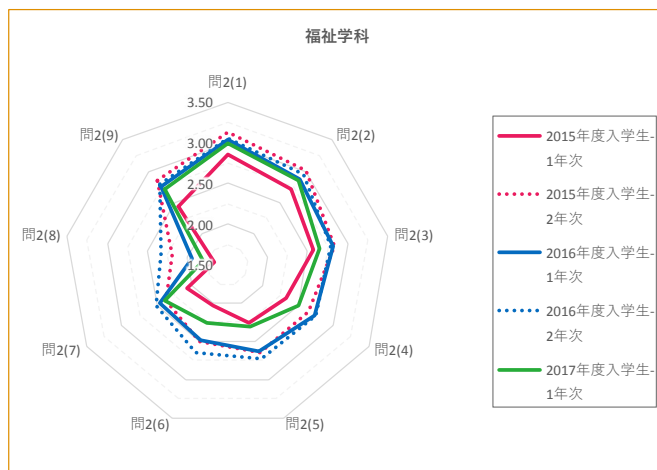
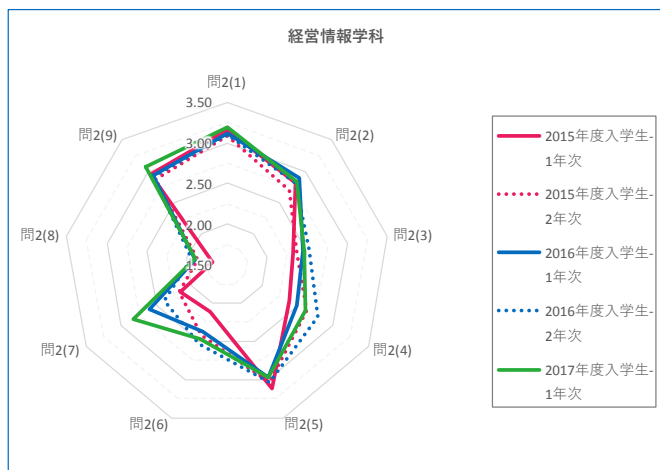
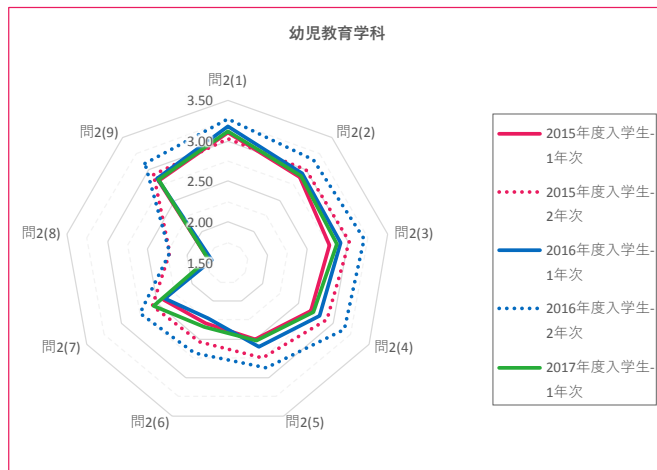
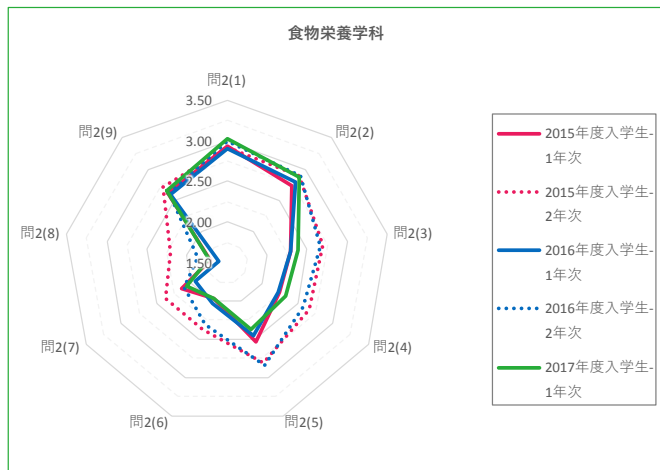
問1 この授業では、授業を通じて獲得できる力（＝「学修成果」）を到達目標として説明してありますが、皆さんは、どの程度「学修成果」を獲得したと自分で評価しますか。
下記の「学修成果」について自己評価してください。なお、該当しない「学修成果」につきましては、「E. まったく身に付かなかった」評価でも構いません。



II. 授業形態・方法

問2 この授業では、「学修成果」を高めるために、どのような工夫がなされていましたか。

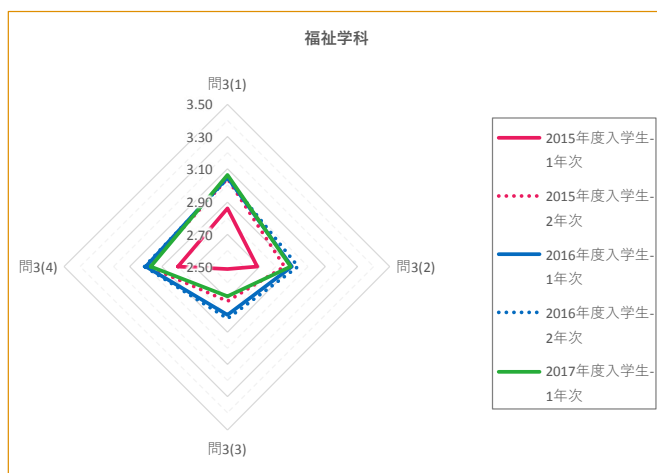
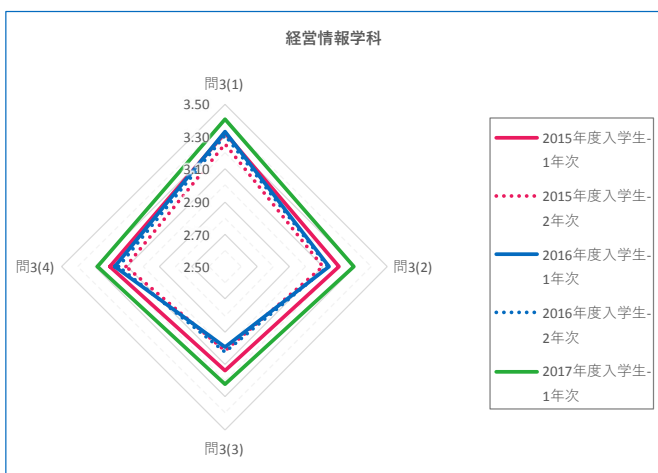
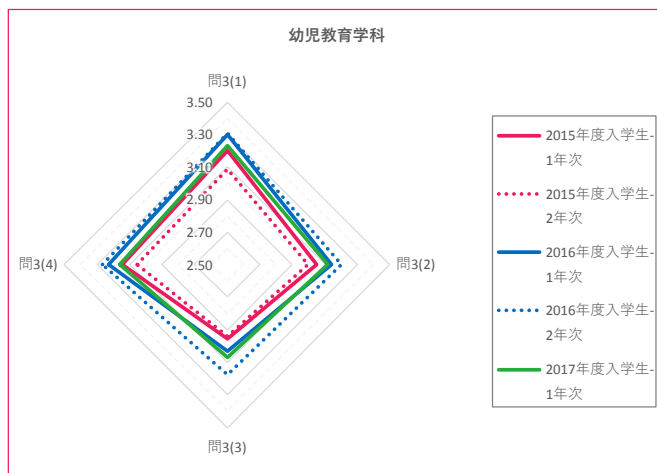
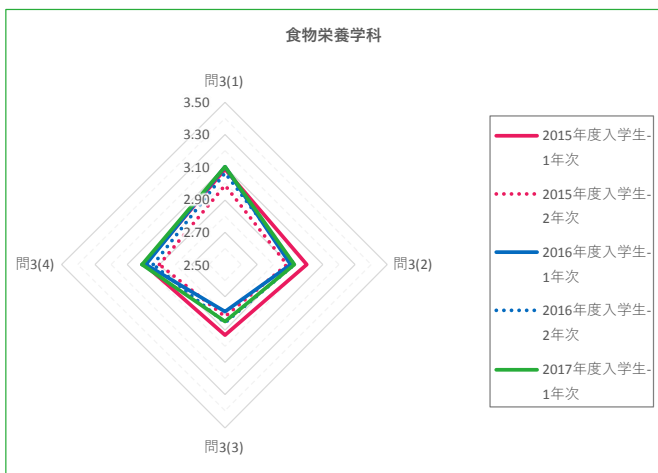
- (1) 教材（配布資料、板書、スライド等）が工夫されていた。
- (2) 授業中に、学生の意見や考えを求められた。
- (3) グループワークやディスカッションなど、学生の参加・協働学習の機会があった。
- (4) 体験的な学習（実習、実験、フィールドワーク等）の機会があった。
- (5) 期末試験の他に、小テストやレポートなどの課題が出された。
- (6) 課題などの提出物が、適切なコメントが付されて返却された。
- (7) 毎回の授業アンケート（「質問・意見」など）に関する解説・回答などフィードバックがあった。
- (8) 個別指導や補習が行われた。
- (9) その他、「学修成果」を高める工夫がなされた。



Ⅲ. 学習意欲を高める授業内容・方法の工夫

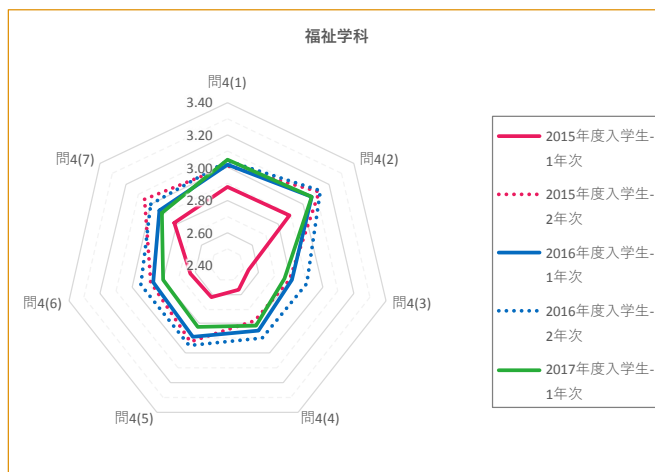
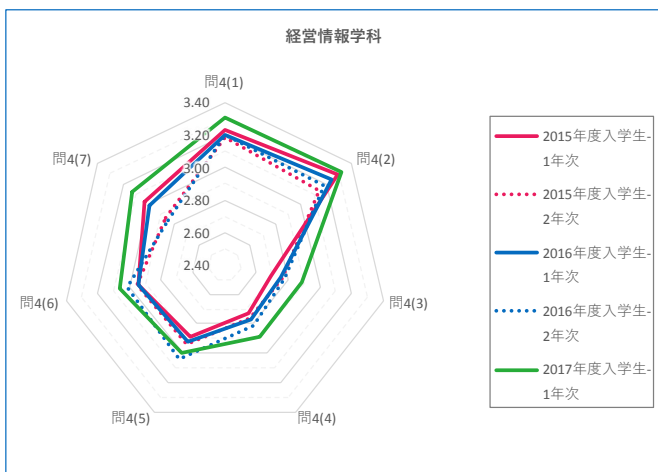
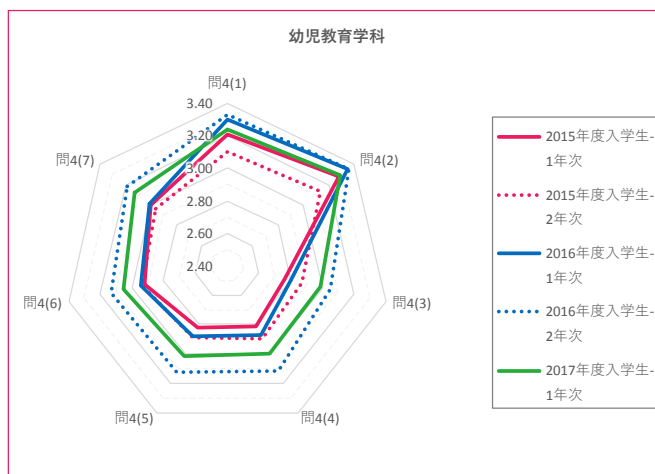
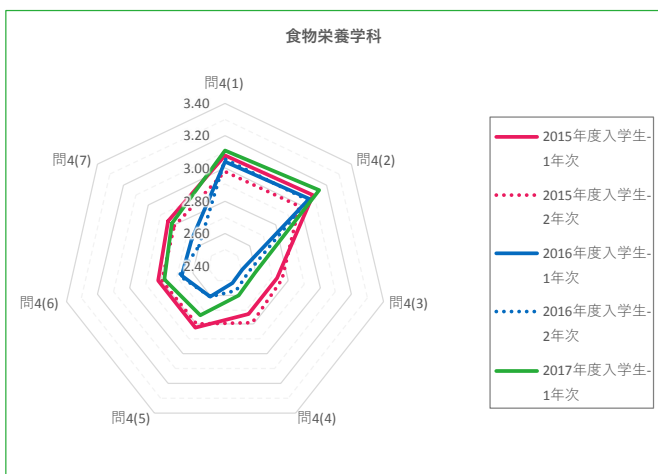
問3 この授業の目的や「学修成果」、成績評価の方法・基準、内容についてどの程度理解できましたか。

- (1) 「授業の目的」が明確で、理解できた。
- (2) 「学修成果」（授業を通じて獲得できる力）について説明があり、理解できた。
- (3) 「成績評価の方法」と「ルーブリック（評価基準）」の説明があり、理解できた。
- (4) 「授業の内容」は、分かりやすく理解できた。



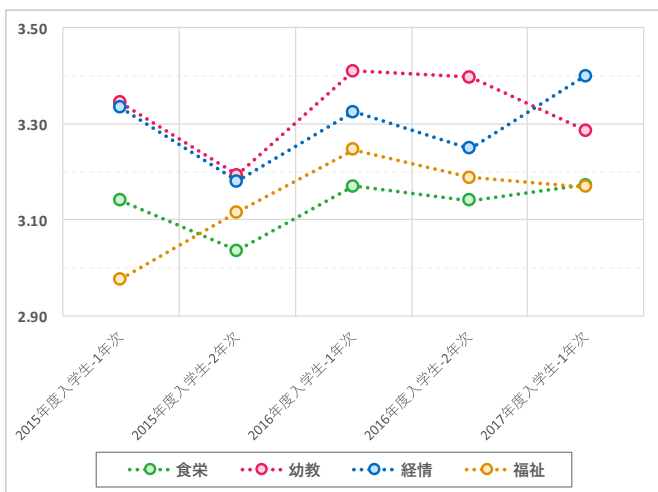
問4 この授業の効果・成果について、どのように評価しますか。

- (1) 授業の内容・方法は、自分の興味・関心を喚起するものだった。
- (2) 授業の内容・方法は、将来の職業に関連する知識や技能・技術を獲得する上で役立った。
- (3) 授業の内容・方法は、人に分かりやすい文章を書く力を獲得する上で役立った。
- (4) 授業の内容・方法は、人に分かりやすく話す・説明する力を獲得する上で役立った。
- (5) 授業の内容・方法は、ものごとを分析的・論理的に考える力を獲得する上で役立った。
- (6) 授業の内容・方法は、課題を見つけ、解決方法を考える力を獲得する上で役立った。
- (7) 授業の内容・方法は、社会に出ていく上で必要な社会性・人間性を高める上で役立った。



IV. 総合評価

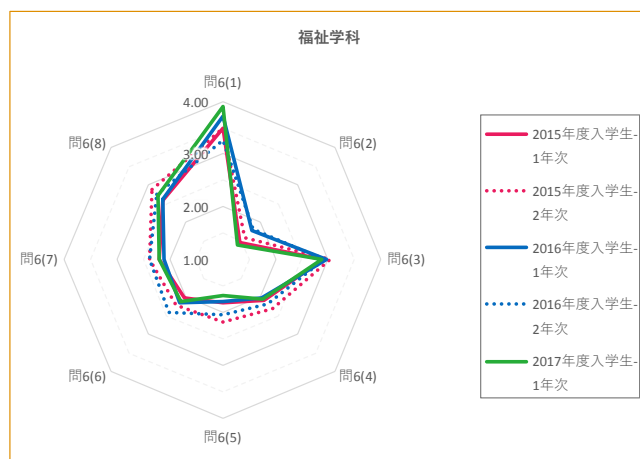
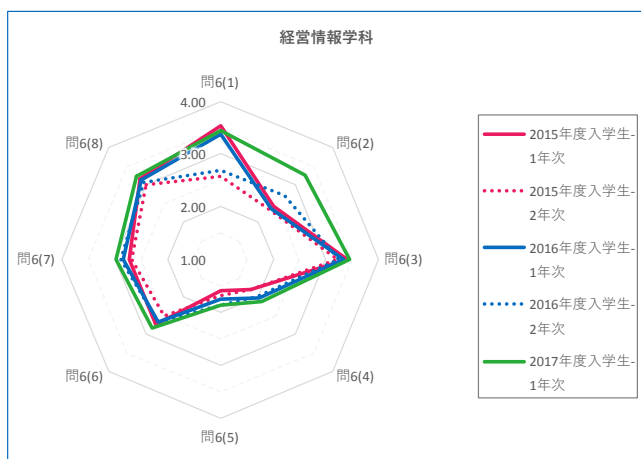
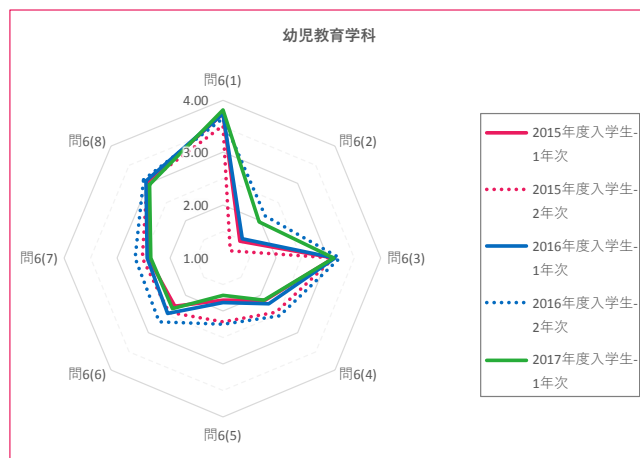
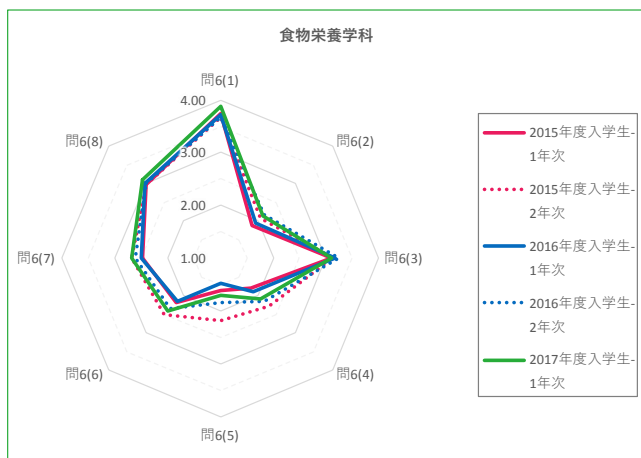
問5 あなたにとって、この授業は、総合的にみて良かったと思いますか。



V. 学修行動（学習意欲に関する自己評価）

問6 あなた自身は、この授業にどのように取り組みましたか。

- (1) この授業の欠席回数は何回ですか。
- (2) 授業1回あたりの、授業外学習（予習・復習・宿題・試験対策等）の時間はどれくらいですか。
- (3) 授業で出された課題や宿題はきちんと行った。
- (4) 授業中に、質問や発言をした。
- (5) 授業時間以外に、担当教員に質問したり相談をした。
- (6) 予習・復習・宿題・試験対策等、友だちと一緒に学習した。
- (7) 授業で分からなかったこと、興味を持ったことは、自主的に調べた。
- (8) 良い成績をとるために努力した。





大学教育再生加速プログラム



学校法人 富山国際学園
富山短期大学

〒930-0193

富山県富山市願海寺水口 444

TEL 076-436-5146 FAX 076-436-5444

URL <http://www.toyama-c.ac.jp>